

（仮称）堺市こども計画策定に関する 市民ニーズ調査結果（概要）



目次

A 子ども・子育て支援に関する調査

0 回答者の属性	1
1 家事・育児時間	2
2 育児休業(未就学児)	5
3 教育・保育事業の利用(未就学児)	6
4 病児保育(未就学児)	8
5 地域子育て支援拠点(未就学児)	9
6 放課後児童クラブ(小学生)	10
7 子育て支援事業(小学生)	11
8 子育てについて	12

B 子どもの生活に関する実態調査

1 生活困窮の状況	13
2 保護者の状況	17
3 子どもの状況	22

C 子ども・若者の意識及び少子化社会に関する調査

0 回答者について	29
1 結婚・子ども	30
2 将来の希望と幸福度	34
3 居場所・孤独感	35
4 困難な経験	37
5 意見を言う方法	41

調査概要

調査の目的

- ✓ 令和7年度を始期とする「（仮称）堺市こども計画」策定にかかる基礎資料とするため

調査種別

- ✓ A調査（子ども・子育て支援に関する調査）
- ✓ B調査（子どもの生活に関する実態調査）
- ✓ C調査（子ども・若者の意識及び少子化社会に関する調査）

調査対象と回収結果

調査種類	調査対象		配布数	回収数	回収率	前回回収率
A調査	就学前の子どもがいる世帯(保護者)		3,000件	1,411件	47.0%	53.8%
	小学生の子どもがいる世帯(保護者)		3,000件	1,552件	51.7%	54.0%
B調査	小学5年生・中学2年生・高校2年生の子どもがいる世帯	保護者	3,000件	1,133件	37.8%	43.6%
		子ども	3,000件	1,059件	35.3%	38.1%
	ひとり親世帯	保護者	1,000件	275件	27.5%	34.1%
		子ども	1,000件	241件	24.1%	31.1%
C調査	15～39歳の子ども・若者		3,000件	853件	28.4%	—

報告書の見方

- ✓ 回答結果の割合「%」は有効サンプル数に対して、それぞれの回答数の割合を小数点以下第2位で四捨五入したものです。そのため、単数回答（複数の選択肢から1つの選択肢を選ぶ方式）であっても合計値が100.0%にならない場合があります。
- ✓ 複数回答（複数の選択肢から2つ以上の選択肢を選ぶ方式）の設問の場合、回答は選択肢ごとの有効回答数に対して、それぞれの割合を示しています。そのため、合計が100.0%を超える場合があります。図表中において「無回答」とあるものは、回答が示されていない、または回答の判別が困難なものです。
- ✓ 図表中の「n（number of case）」は、集計対象者総数（あるいは回答者限定設問の限定条件に該当する人）を表しています。

A 子ども・子育て支援に関する調査

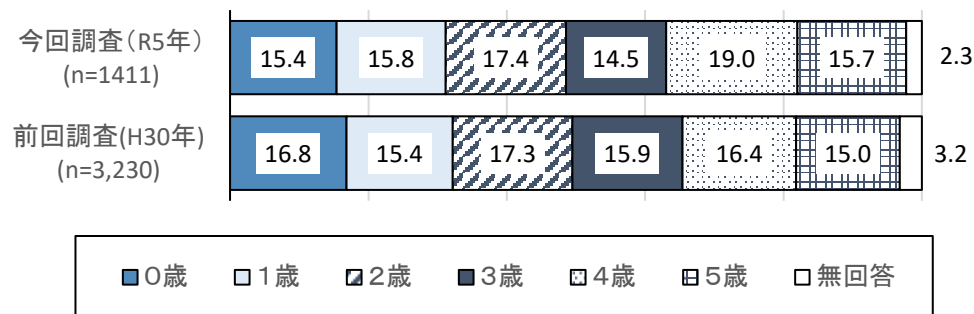


子どもの年齢・学年と保護者の配偶者・パートナーの有無

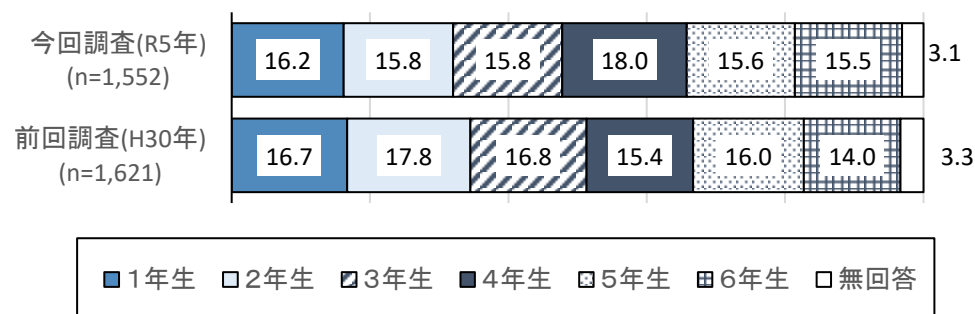
- ✓ 回答者（子ども）の年齢、学年は平成30年時点の調査と大きく変わりはありません。
- ✓ 配偶者・パートナーの有無についても、平成30年時点の調査と大きく変わりはありません。

子どもの年齢・学年

●就学前

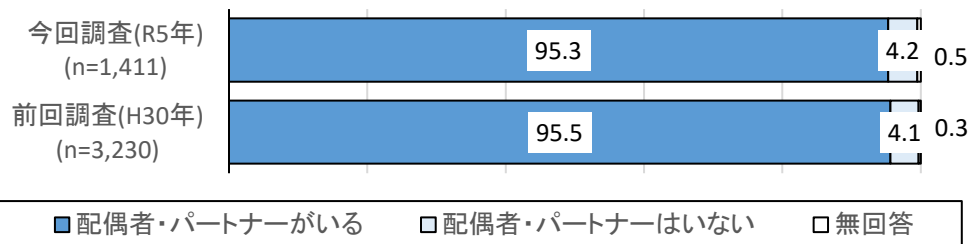


●小学生(学年)

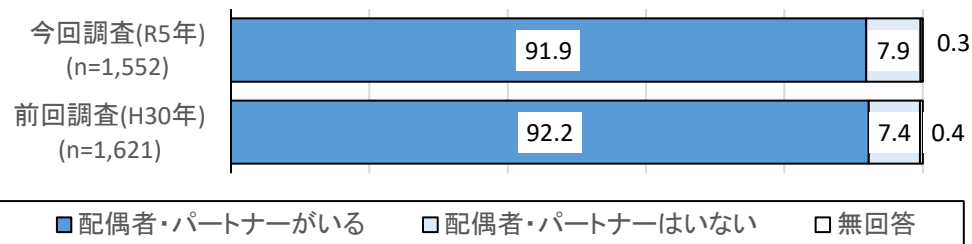


保護者の配偶者・パートナーの有無

●就学前



●小学生

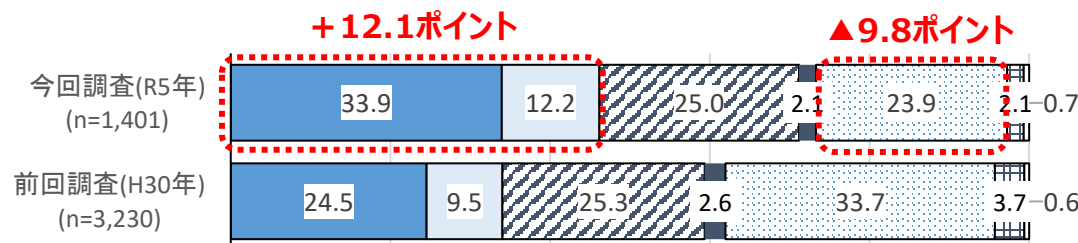


1 家事・育児時間（未就学児）

2

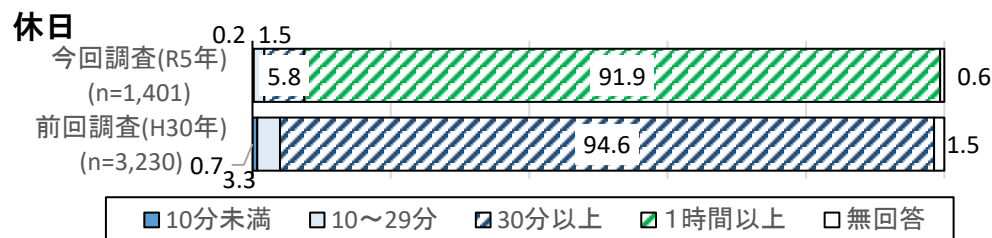
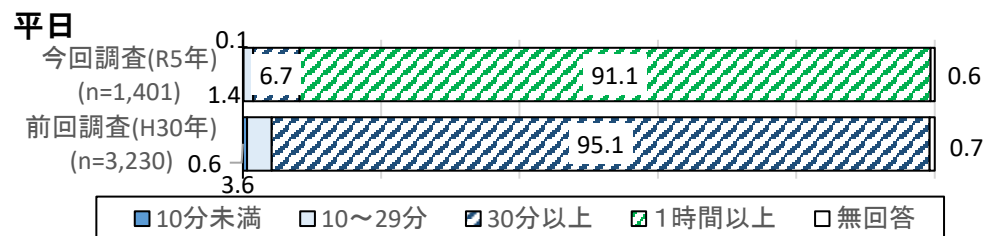
母親の家事・育児時間の変化（未就学児）

- ✓ 就学前児童の母親は、「フルタイム」での就労がおよそ5割と、平成30年時点と比べて大きく増加しています。
- ✓ 一方で、家事・育児時間については、大きな変化がありません。

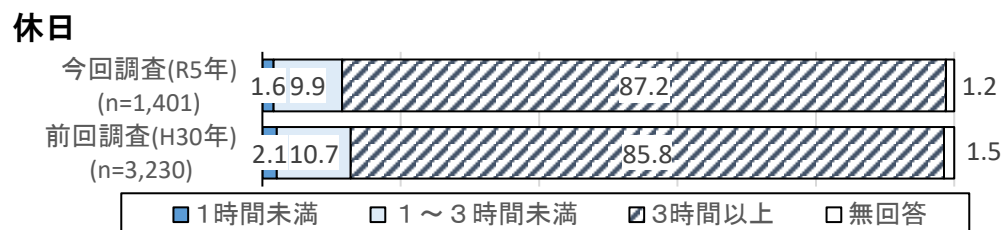
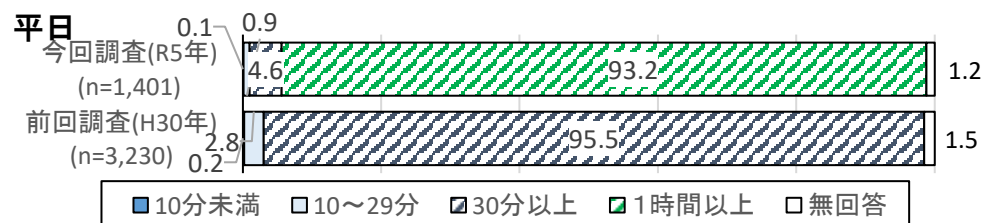


- フルタイム（1週5日程度・1日8時間程度の就労）で就労しており、産休・育休・介護休業中ではない
- フルタイムで就労しているが、産休・育休・介護休業中である
- パート・アルバイト等で就労しており、産休・育休・介護休業中ではない
- パート・アルバイト等で就労しているが、産休・育休・介護休業中である
- 以前は就労していたが、現在は就労していない
- これまで就労したことがない
- 無回答

母親の家事時間の変化（経年比較）



母親の育児時間の変化（経年比較）

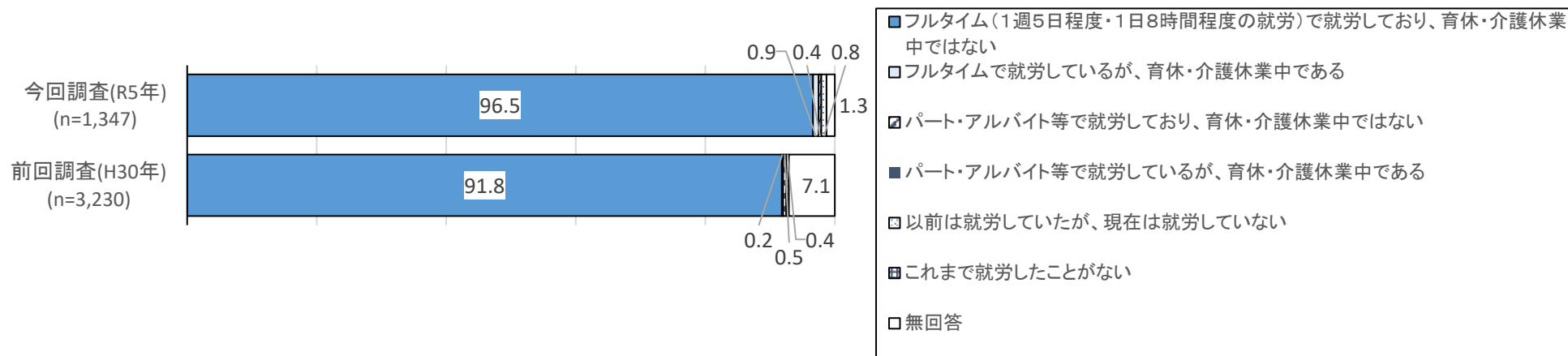


1 家事・育児時間（未就学児）

3

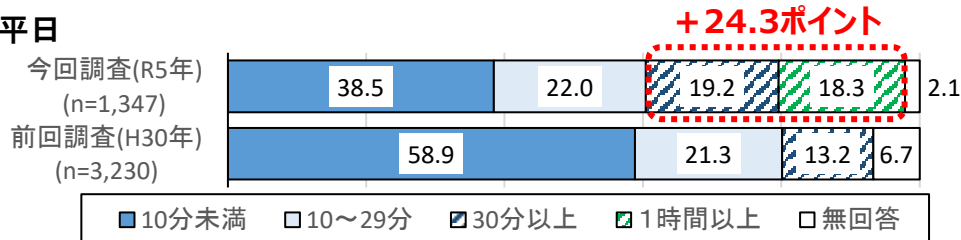
父親の家事・育児時間の変化（未就学児）

- ✓ 就学前児童の父親は、96.5%がフルタイムで就労しており、平成30年時点と大きく変化はありません。
- ✓ 一方で、家事・育児時間は大きく増加しています。

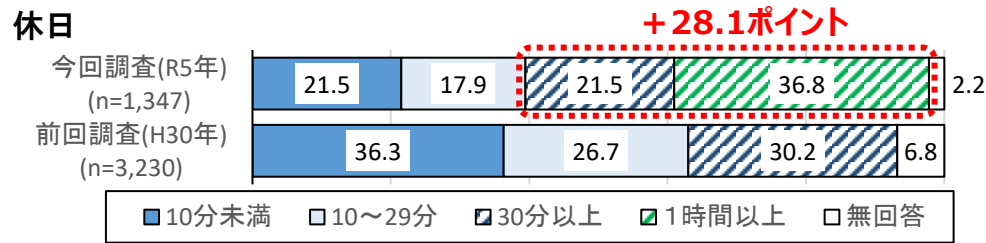


父親の家事時間の変化（経年比較）

平日

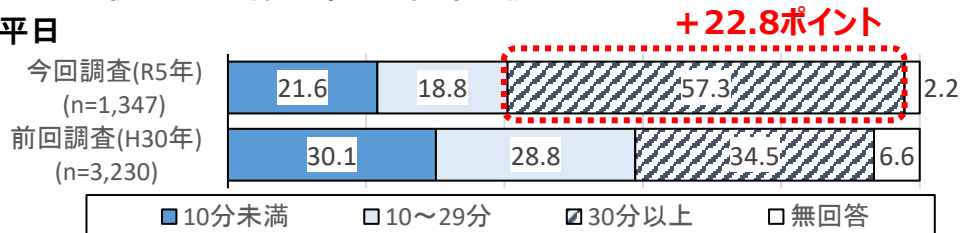


休日

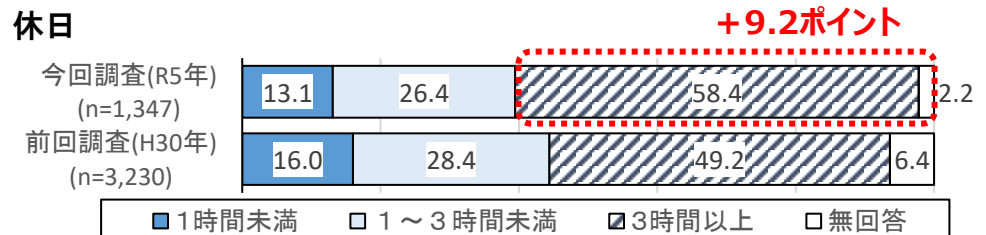


父親の育児時間の変化（経年比較）

平日



休日



1 家事・育児時間（未就学児と小学生）

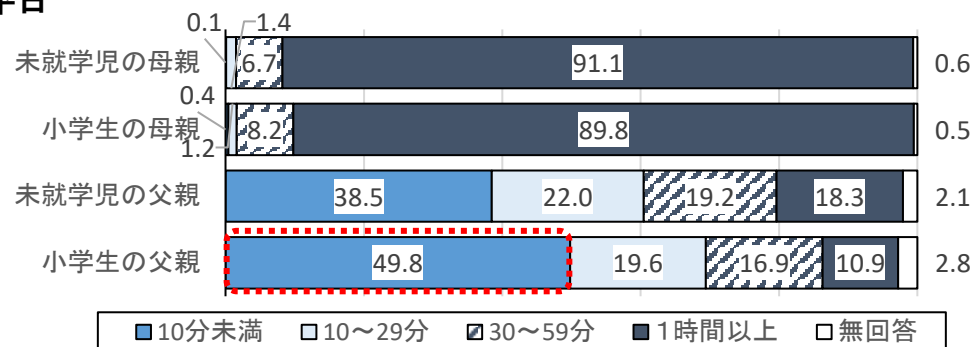
4

家事・育児時間の変化

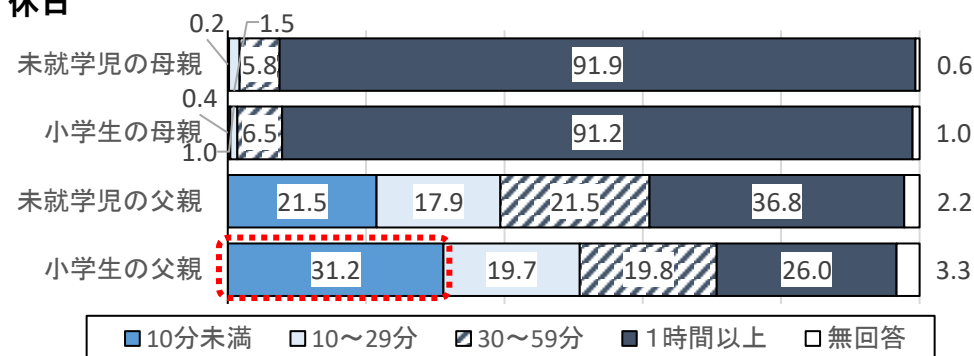
- ✓ 家事時間については、父親は未就学児と小学生の調査を比較すると、小学生は「1時間以上」が低く、「10分未満」が高くなっています。
- ✓ 育児時間については、未就学児と小学生の調査を比較すると、小学生は父母ともに「1時間以上」や「3時間以上」が低くなっています。

家事時間

平日

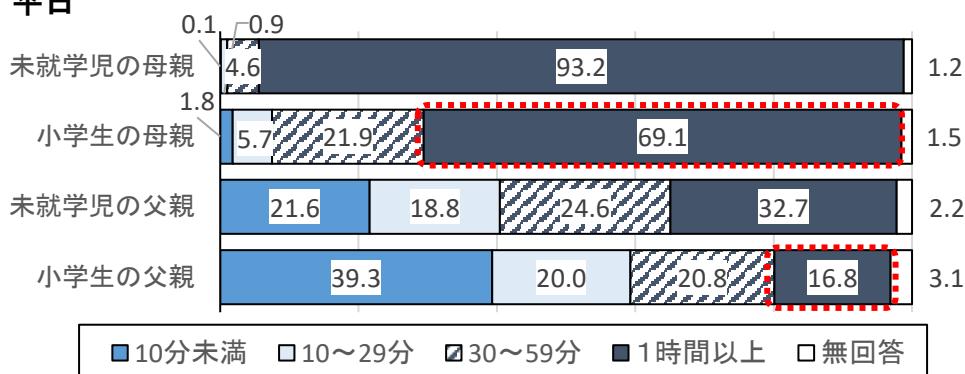


休日

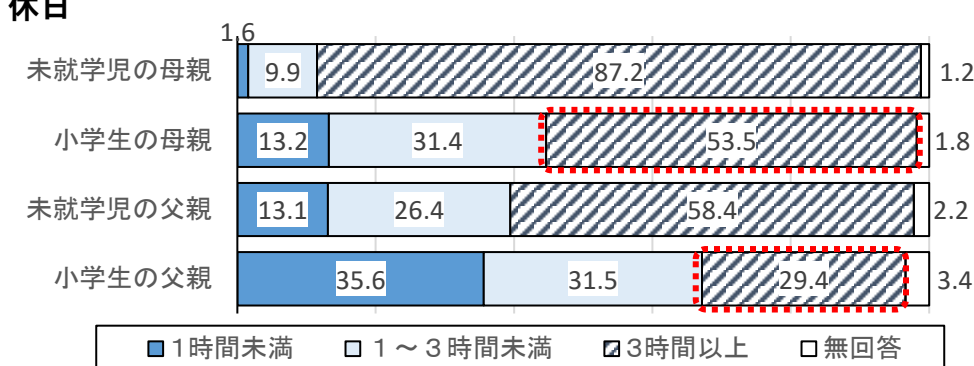


育児時間

平日



休日



2 育児休業（未就学児）

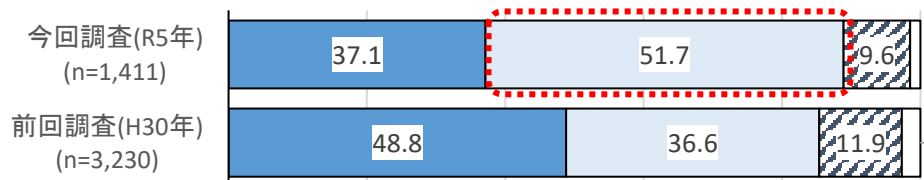
5

育児休業（未就学児）

- ✓ 育児休業を「取得した（取得中である）」人は母親・父親両者ともに、平成30年時点に比べて増加しています。
- ✓ 「子育てや家事に専念するために退職した」や「職場に育児休業の制度がなかった（就業規則に定めがなかった）」を理由として取得しない母親は減少しています。
- ✓ 取得しない理由として「職場に育児休業を取りにくい雰囲気があった」や「仕事が忙しかった」を理由にする父親は増加し、「配偶者が無職、祖父母等の親族にみてもらえるなど制度を利用する必要がなかった」を理由にする父親は減少しています。

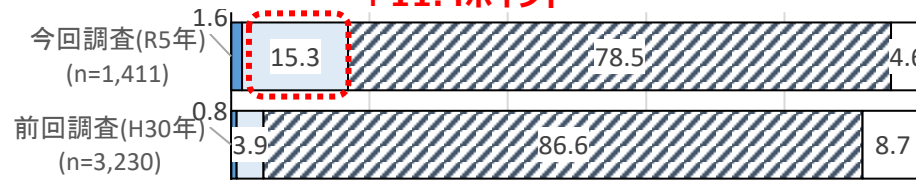
母親の育児休業取得状況

+15.1ポイント

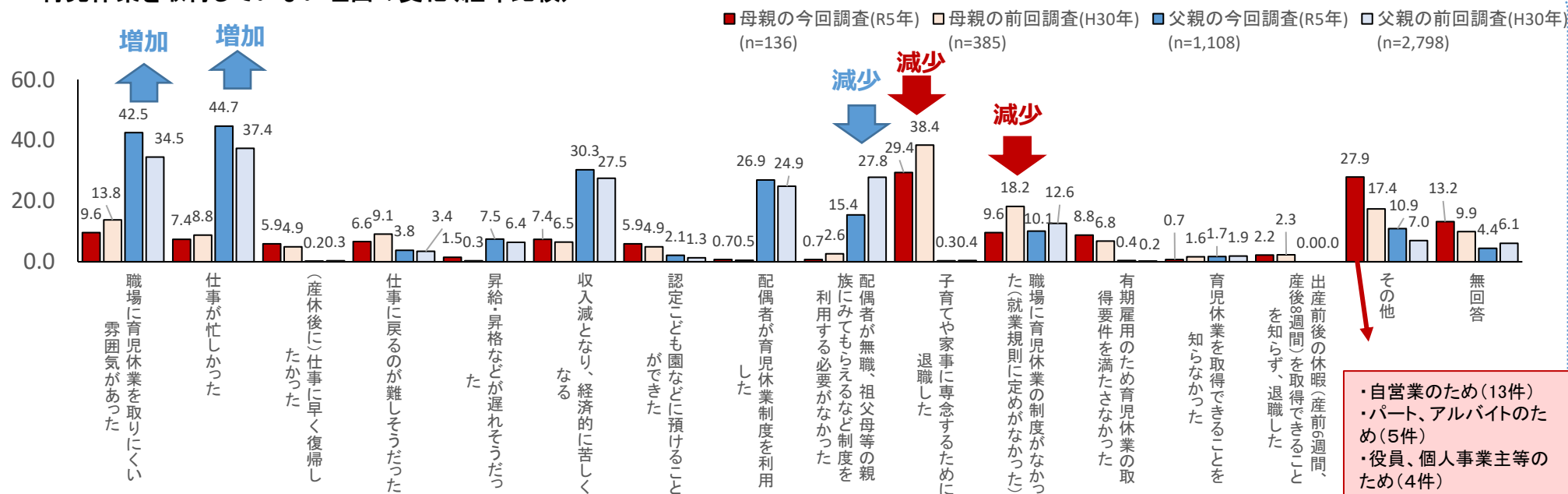


父親の育児休業取得状況

+11.4ポイント



育児休業を取得していない理由の変化(経年比較)



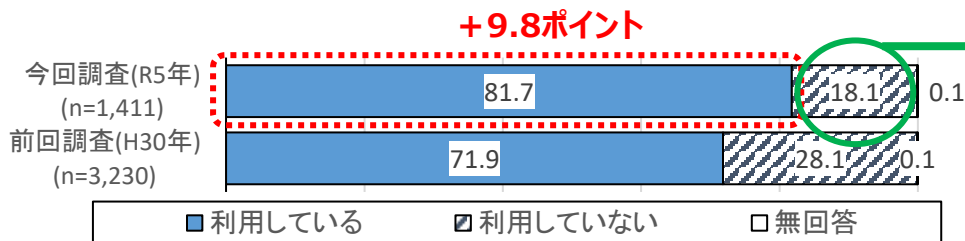
3 教育・保育事業の利用（未就学児）

6

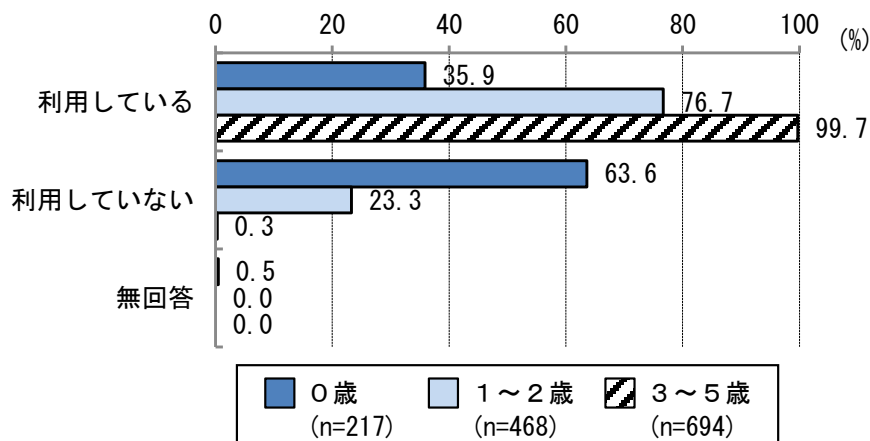
平日の定期的な教育・保育事業の利用状況

- ✓ 平日の定期的な教育・保育事業の利用者が増加しており、子どもが0歳時点で35.9%の人が利用しています。
- ✓ 平日の定期的な教育・保育事業を利用していない者のうち、半分以上の人がこども誰でも通園制度（仮称）の利用を希望しています。

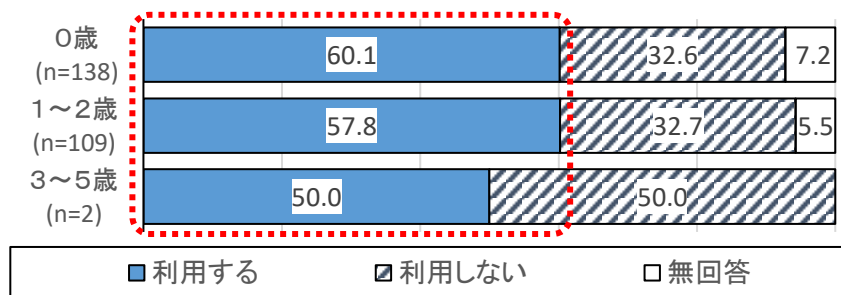
平日の定期的な教育・保育事業の利用状況（経年比較）



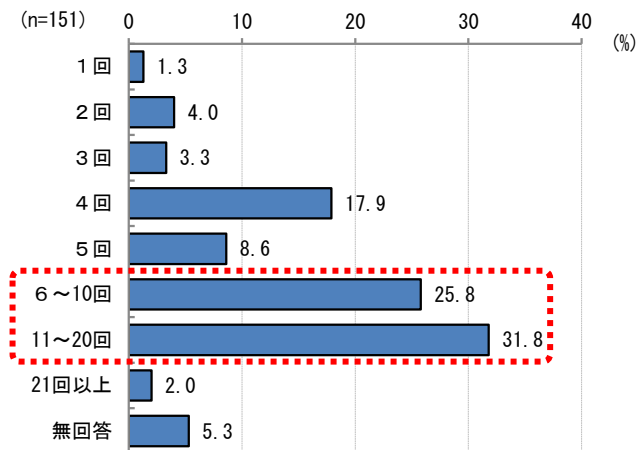
平日の定期的な教育・保育事業の利用状況（年齢別）



こども誰でも通園制度（仮称）の利用希望（年齢別）



1カ月あたりの利用希望日数



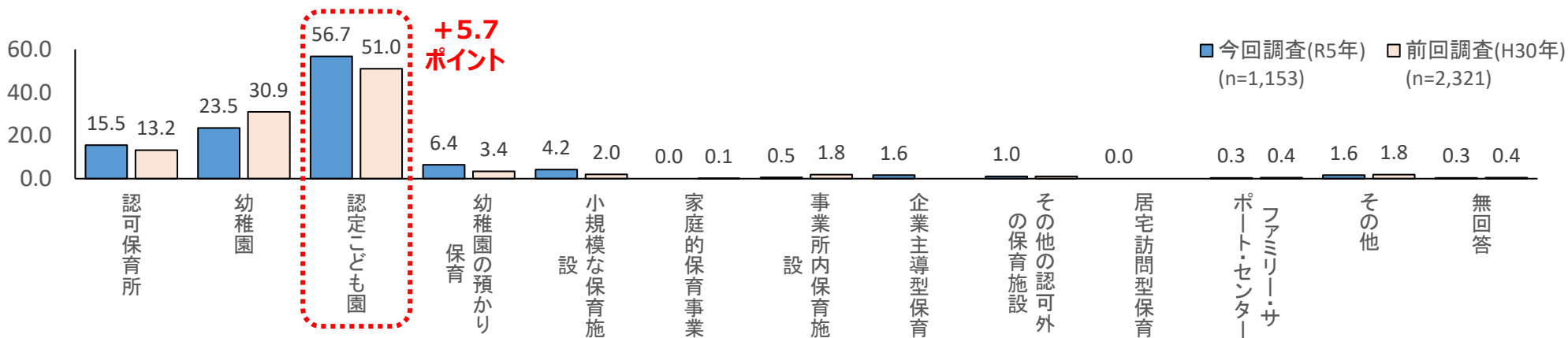
3 教育・保育事業の利用（未就学児）

7

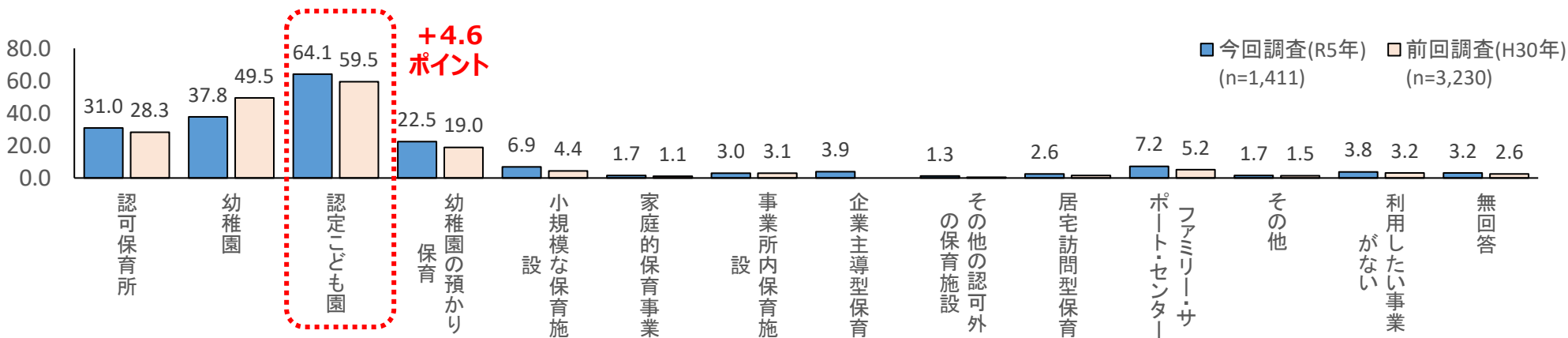
平日の定期的な教育・保育事業の利用内容と希望

✓ 平成30年時点と比べると、「認定こども園」の利用者が増加し、「幼稚園」の利用者が減少しています。利用希望も同様の傾向にあります。

平日の定期的な教育・保育事業の利用内容（経年比較）



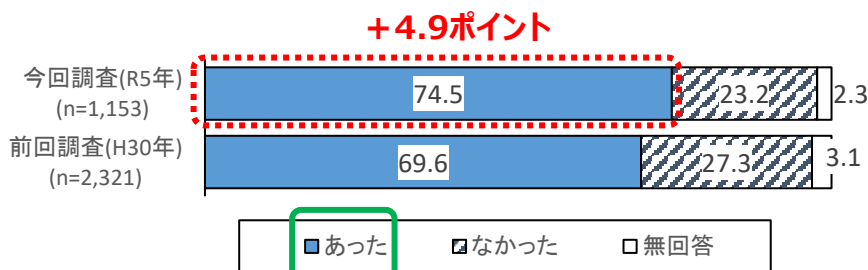
平日の定期的な教育・保育事業の利用希望（経年比較）



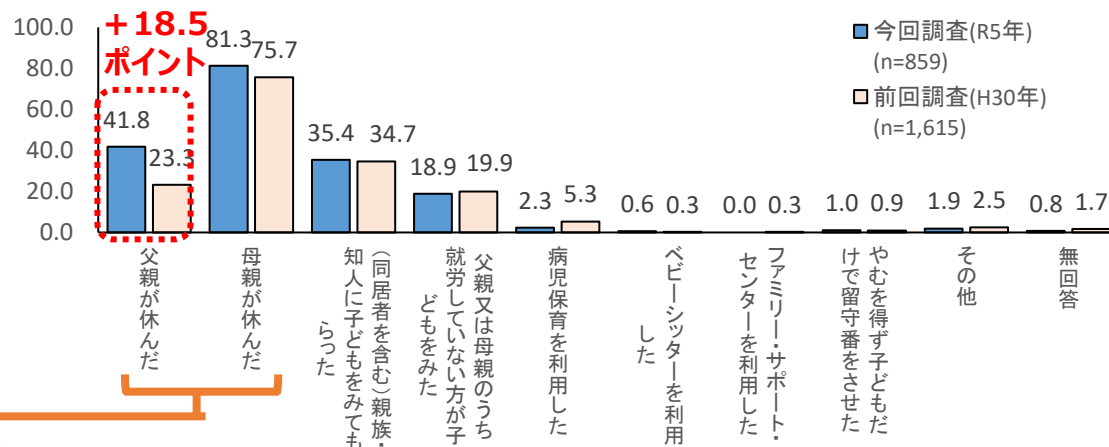
病児保育の利用状況と利用希望

- ✓ 病気やケガで通常の教育・保育事業が利用できなかった場合の対応として、「父親が休んだ」が大きく増加しています。
- ✓ 病児保育の利用希望はやや減少しています。病児保育を利用したくない理由として、預けることがかわいそう、不安、父親か母親が対応するという回答が多くを占めるというのは前回調査と同様の傾向です。

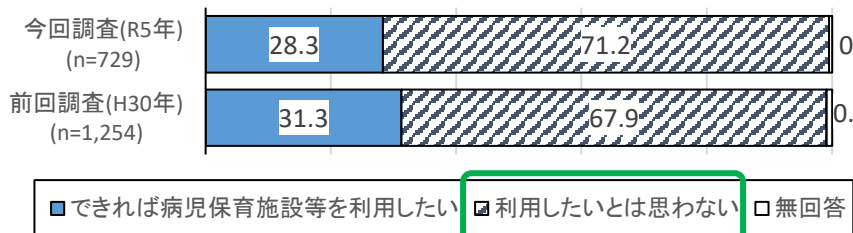
病気やケガで通常の事業が利用できなかったこと（経年比較）



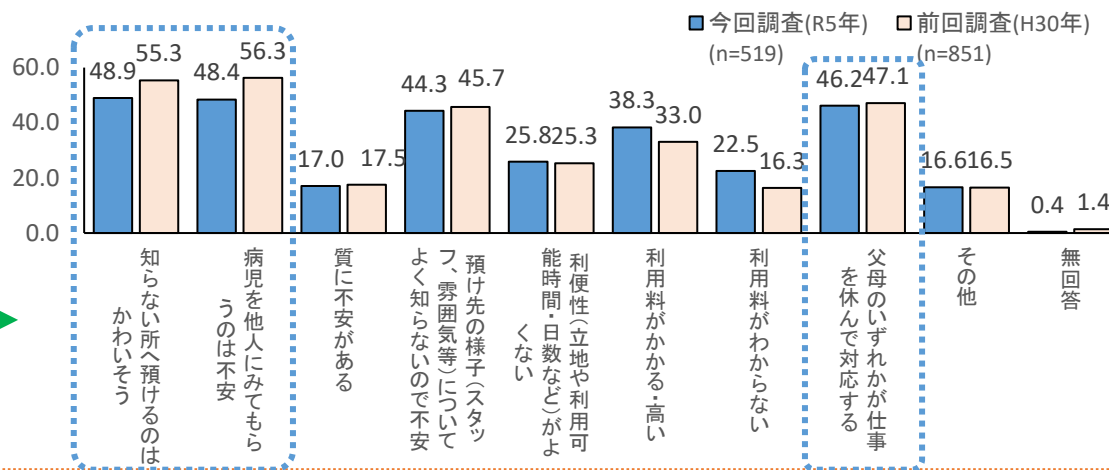
病気やケガで通常の事業が利用できなかった場合の対処方法（経年比較）



病気やケガで通常の事業が利用できず、 父母が休んだ際の病児保育の利用希望（経年比較）



病児保育を利用したくない理由（経年比較）

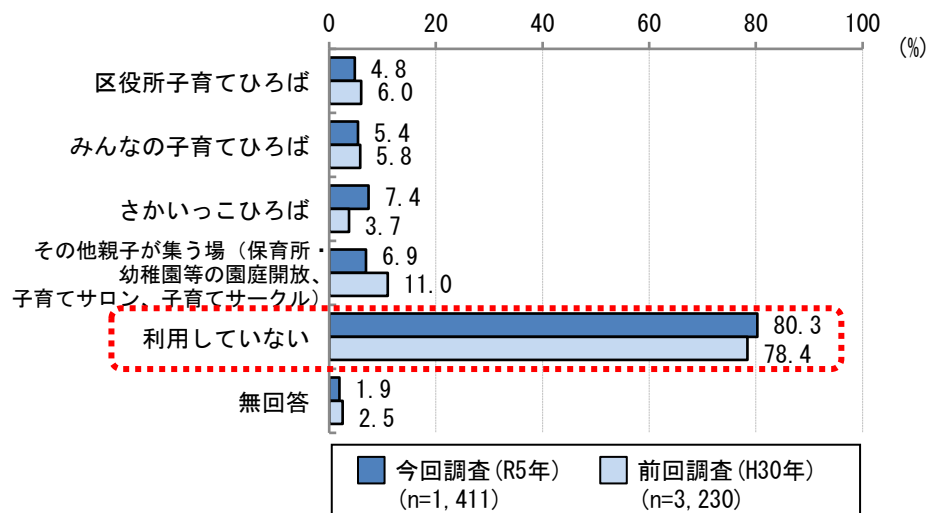


5 地域子育て支援拠点（未就学児）

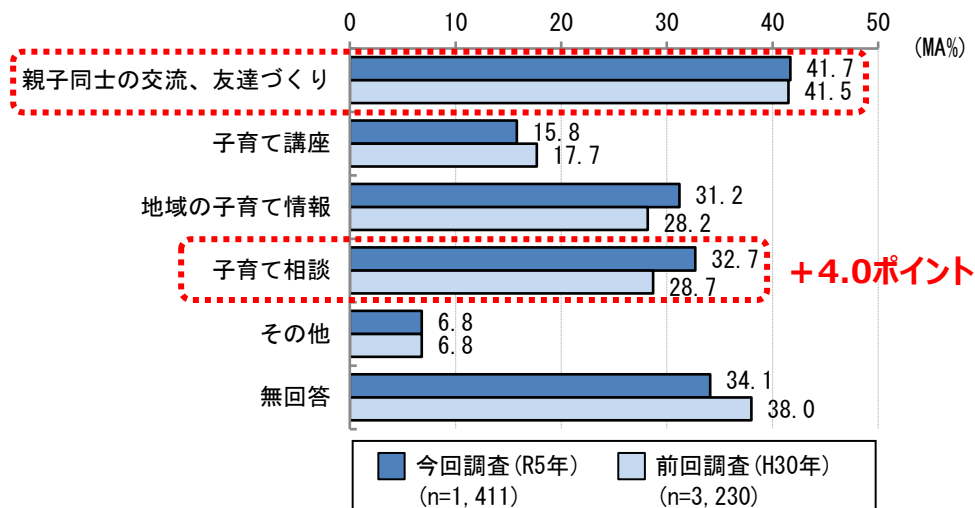
地域子育て支援拠点の利用状況と希望すること

- ✓ 地域子育て支援拠点の利用状況は、平成30年時点と大きく変化がなく、およそ8割の人が「利用していない」と回答しています。
- ✓ また、地域子育て支援拠点に希望することも、平成30年時点と同様で「親子同士の交流、友達づくり」が最も高くなっていますが、「子育て相談」への希望がわずかに増加しています。

地域子育て支援拠点の利用状況（経年比較）



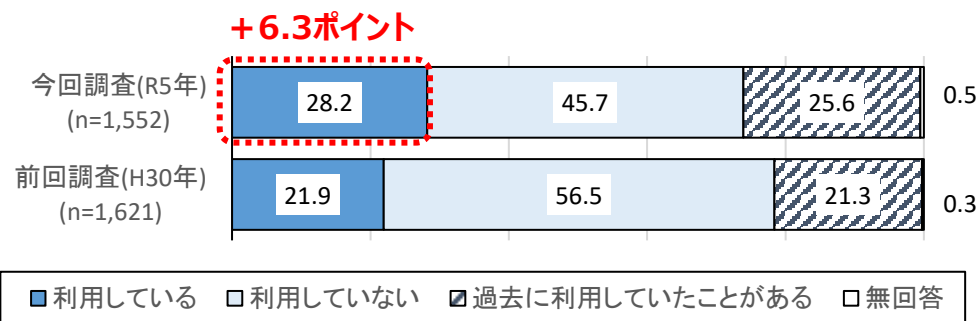
地域子育て支援拠点事業に希望すること（経年比較）



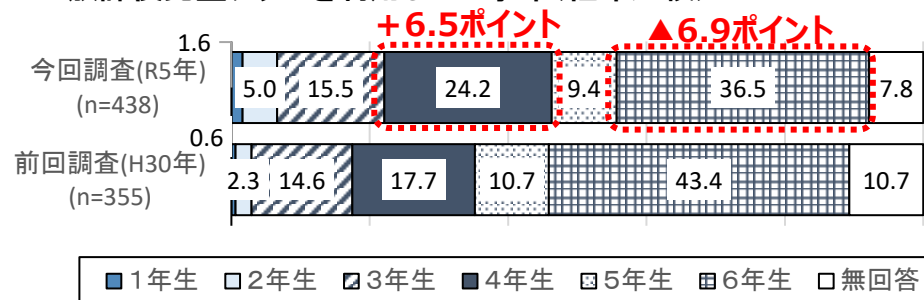
放課後児童クラブの利用状況と利用希望

- ✓ 放課後児童クラブを「利用している」人が増加しており、利用日数と希望利用日数はともに「5日」が最も高くなっています。
- ✓ また、放課後児童クラブを何年生まで利用したいかは、「4年生」の希望が高くなり、「6年生」まで利用する希望は減少しています。

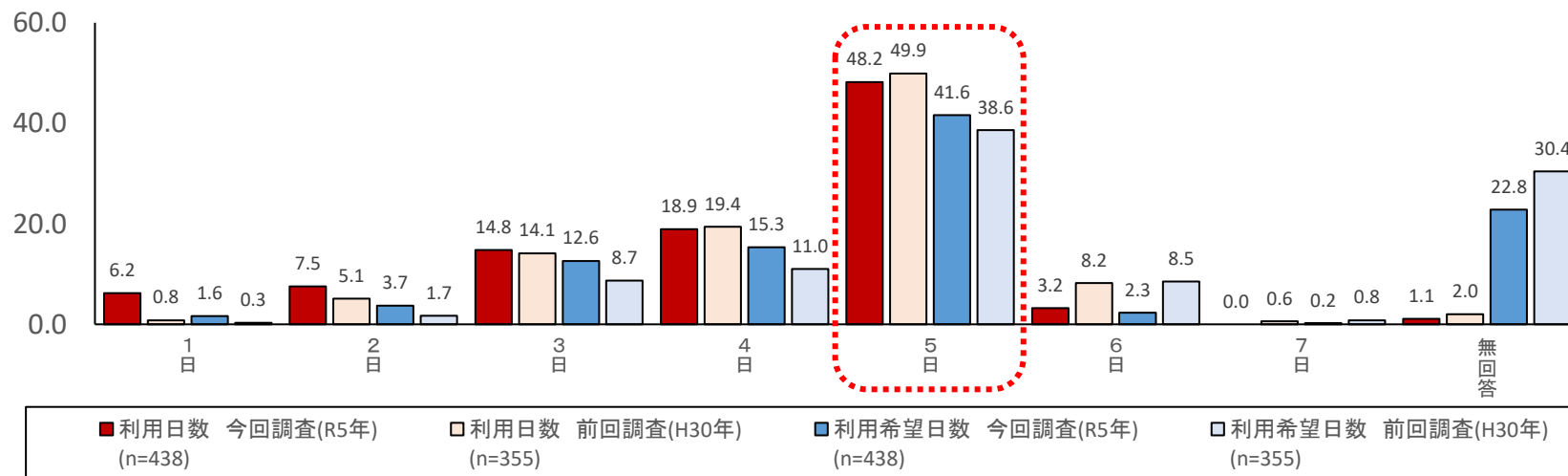
放課後児童クラブの利用状況（経年比較）



放課後児童クラブを利用したい学年（経年比較）



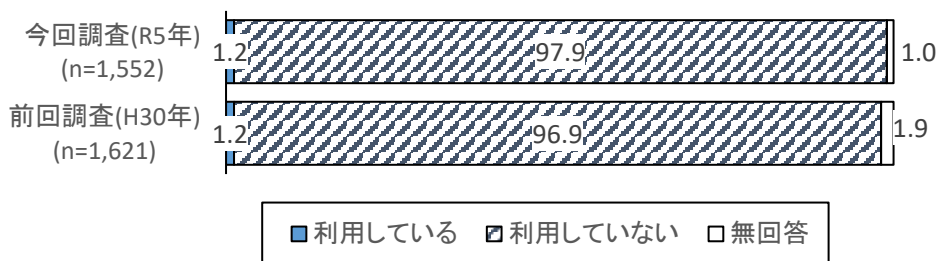
利用日数と利用希望日数（経年比較）



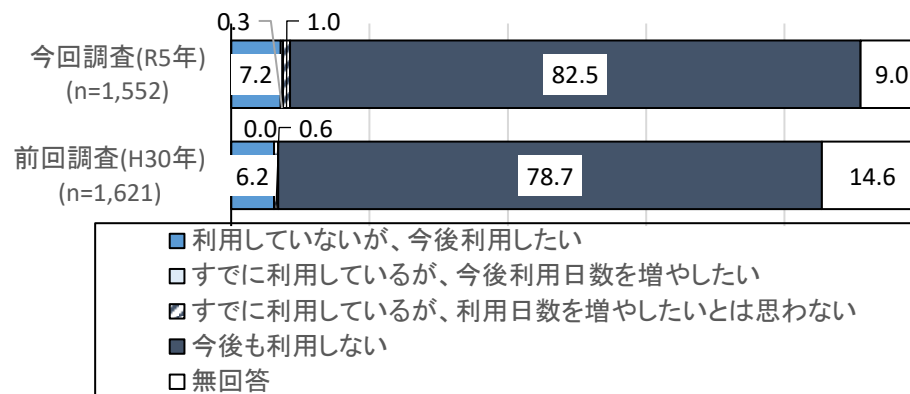
地域子育て支援事業の利用状況と利用希望

- ✓ 地域子育て支援事業（ファミリー・サポート・センター）の利用状況と利用希望は、平成30年時点と大きく変化がありません。

地域子育て支援事業（ファミリー・サポート・センター）の利用状況
（経年比較）



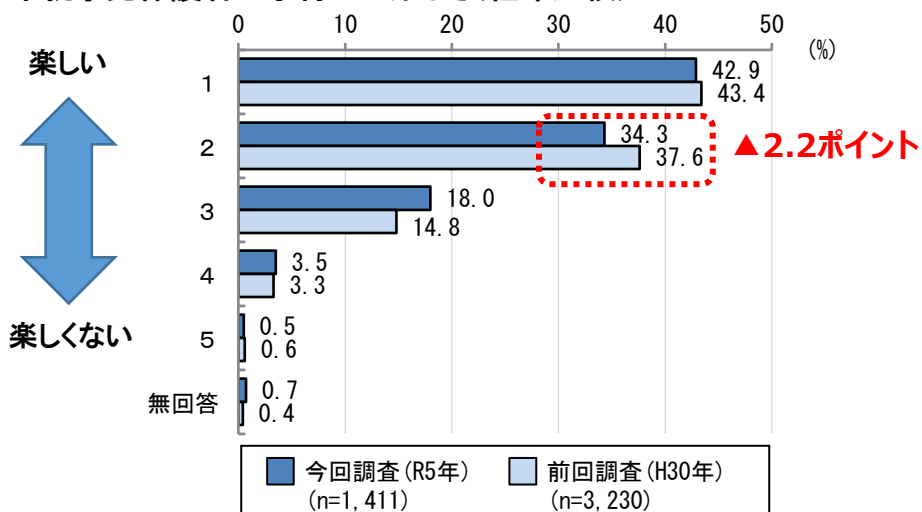
地域子育て支援事業（ファミリー・サポート・センター）の利用希望
（経年比較）



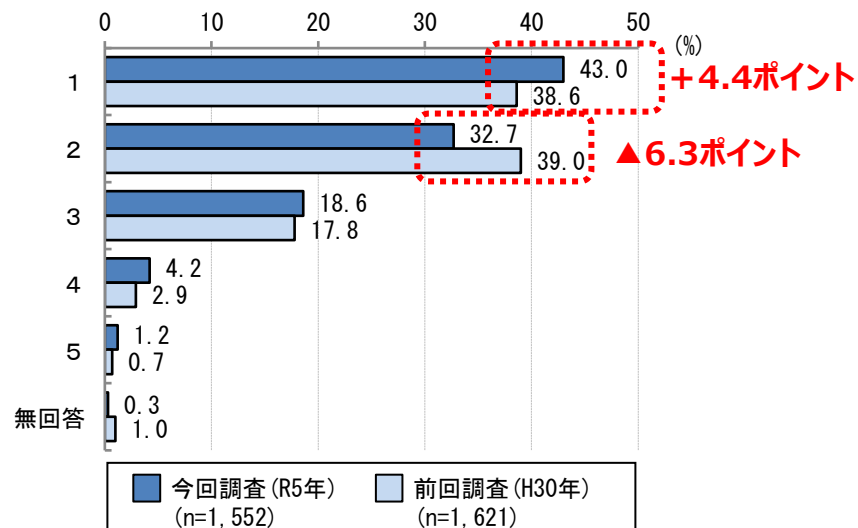
子育ての楽しさ・子育て環境の満足度

- ✓ 子育ての楽しさについては、平成30年時点に比べて、わずかですが「楽しい」が減少傾向にあります。
- ✓ 子育て環境への満足度は、平成30年時点と大きく変わらず、小学生より未就学児の保護者の方が満足度が高くなっています。

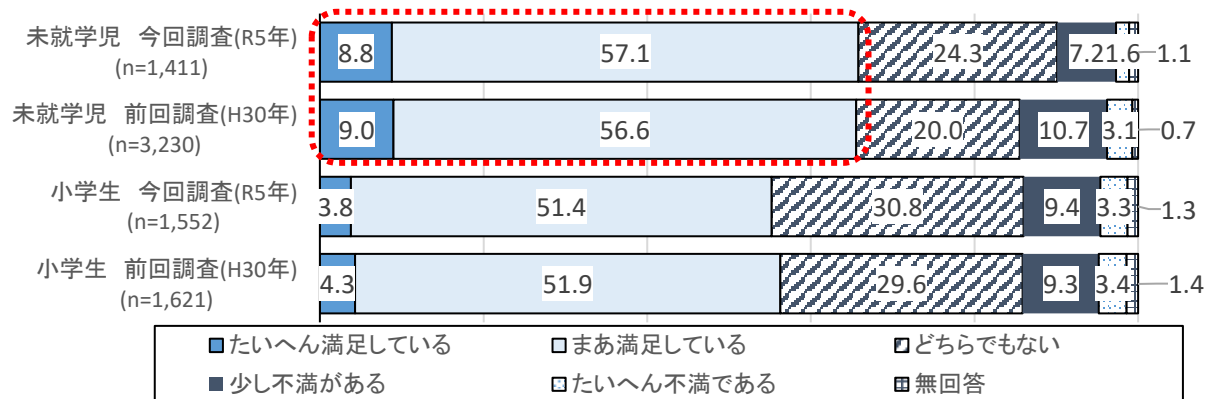
未就学児保護者の子育ての楽しさ(経年比較)



小学生保護者の子育ての楽しさ(経年比較)



子育て環境への満足度(経年比較)



B 子どもの生活に関する実態調査

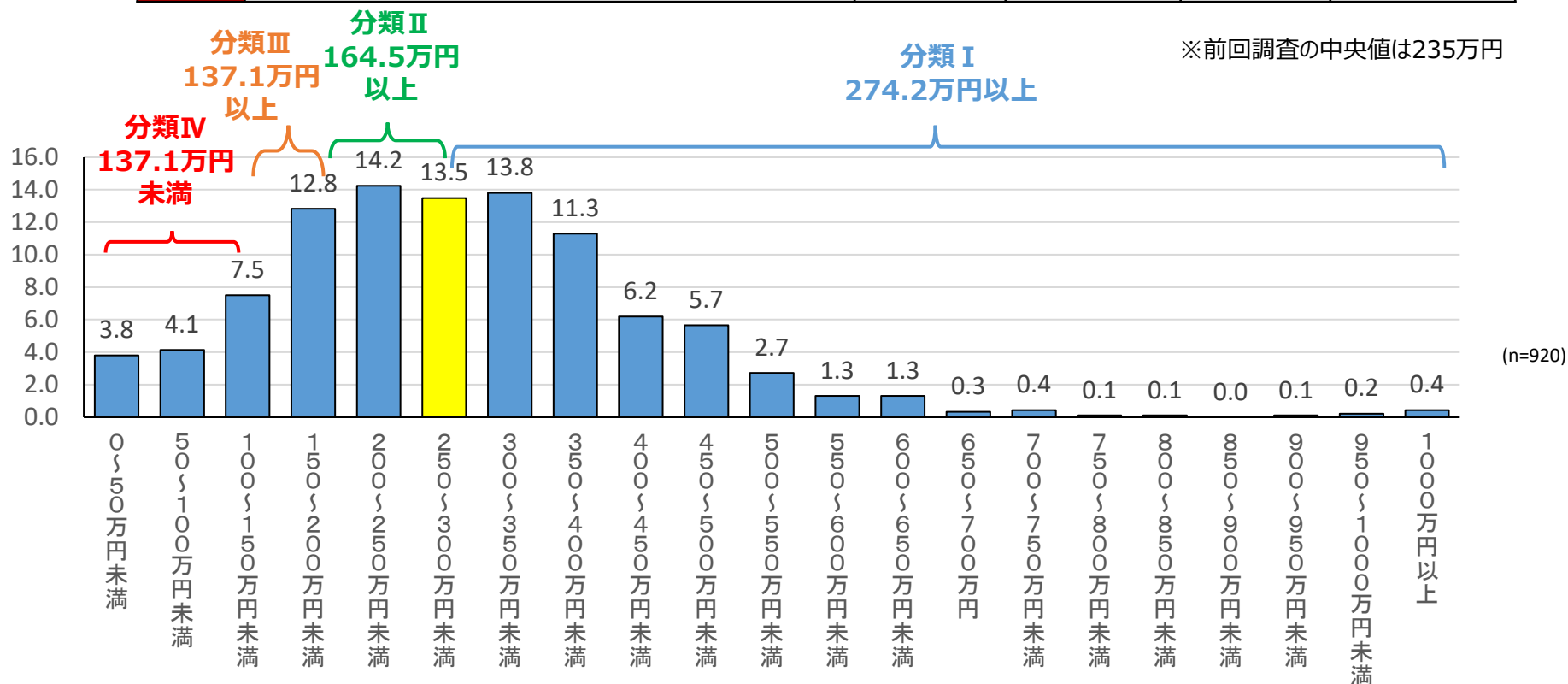


等価可処分所得の分布

- ✓ 等価可処分所得別の集計で、『分類Ⅳ』（貧困線未満）に該当する相対的に貧困状態にある世帯の割合は13.3%となっています。また、『分類Ⅳ』の世帯に属する子どもの数が子ども全体に占める割合（子どもの貧困率）を試算すると13.1%でした。

等価可処分所得

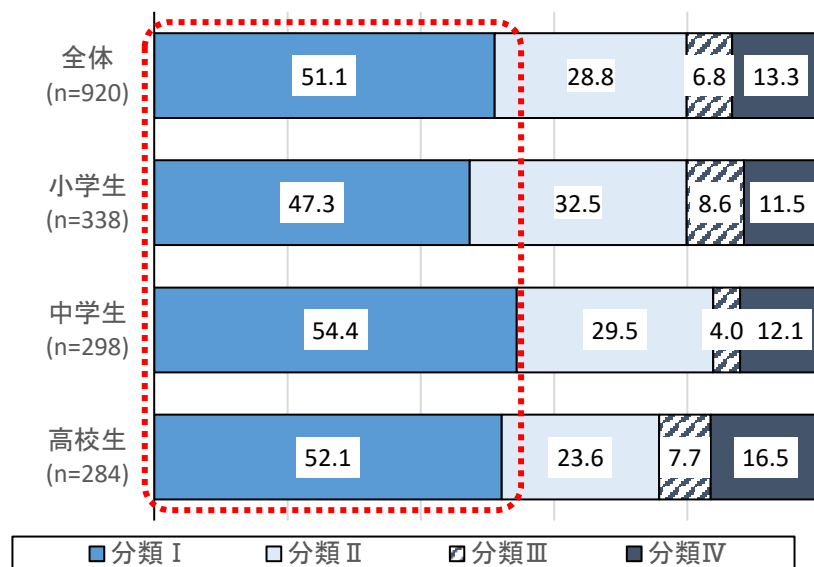
	等価可処分所得の範囲	世帯の割合		子どもの割合	
		今回(R5)	前回(H28)	今回(R5)	前回(H28)
分類Ⅰ	等価可処分所得中央値(274.2万円)以上の層	51.1%	49.8%	48.8%	48.0%
分類Ⅱ	等価可処分所得中央値未満で、中央値の60%以上の層	28.8%	29.0%	31.0%	31.0%
分類Ⅲ	等価可処分所得中央値の50%以上60%未満の層	6.8%	5.4%	7.0%	5.1%
分類Ⅳ	等価可処分所得中央値の50%未満の層(貧困線未満)	13.3%	15.8%	13.1%	15.9%



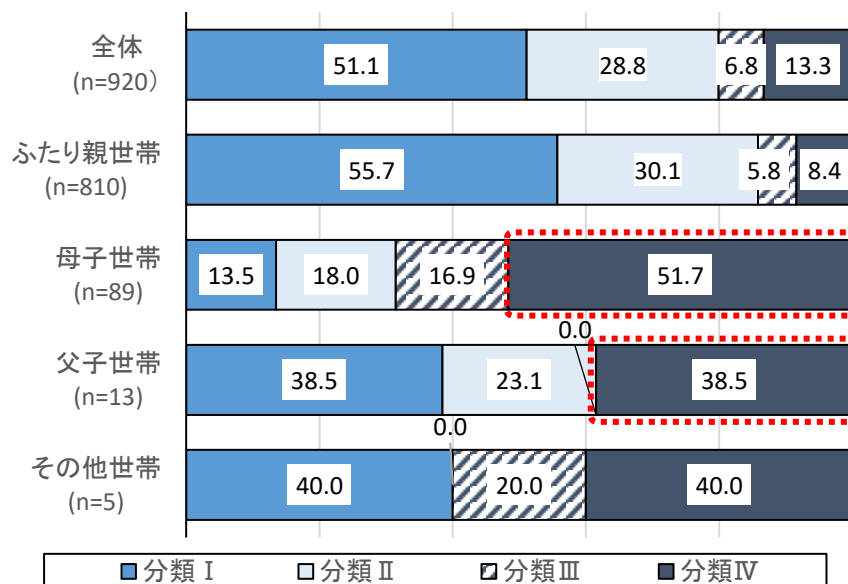
等価可処分所得の分類

- ✓ 学年別でみると、「分類Ⅰ」（等価可処分所得が中央値よりも高い世帯）の割合は学年による明らかな傾向の違いはありませんが、「分類Ⅳ」（等価可処分所得が貧困線よりも低い世帯）の割合は学年が上がるほど高くなる傾向があります。
- ✓ 世帯別でみると、全体やふたり親世帯と比べてひとり親世帯（母子世帯及び父子世帯）の「分類Ⅳ」の割合が高く、特に母子世帯では半分以上（51.7%）の世帯が「分類Ⅳ」の状況にあります。

等価可処分所得の分類(学年別)



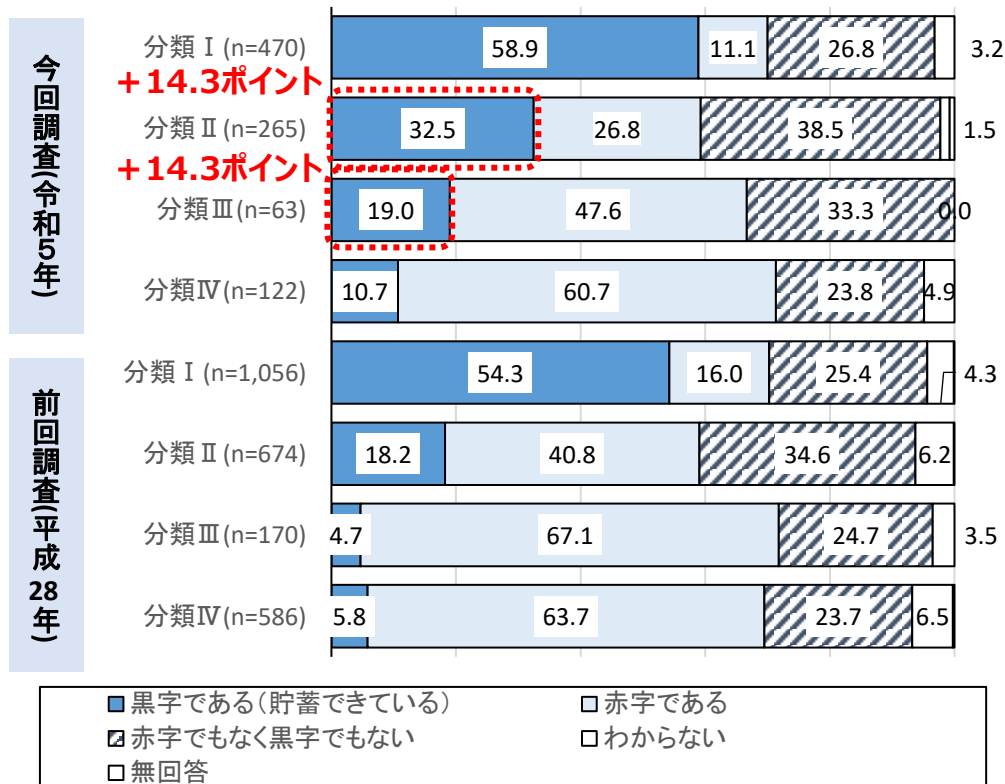
等価可処分所得の分類(世帯別)



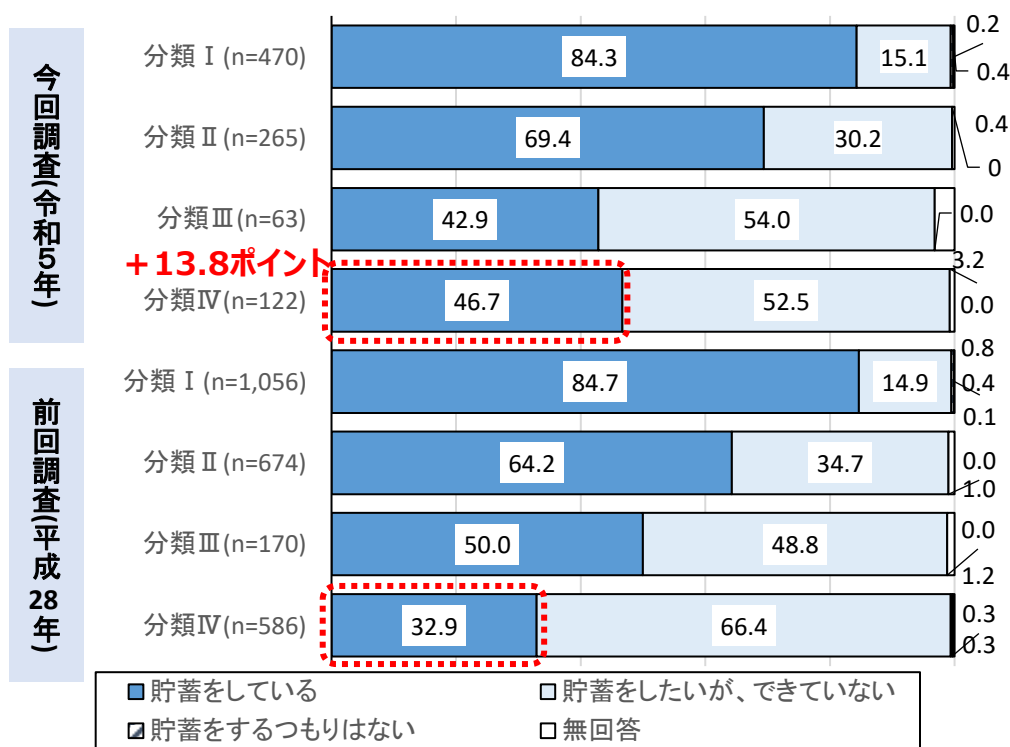
家計・貯蓄の状況

- ✓ 1年間の家計の収支状況は、等価可処分所得が低くなるほど「黒字」の割合が減り、「赤字」の割合が増えています。前回調査と比較すると、いずれの分類でも「黒字」の割合が増えています。
- ✓ 子どもの将来のための貯蓄状況については、「分類Ⅲ」「分類Ⅳ」は半分以上が「貯蓄したいができていない」と回答しています。前回調査と比較すると「分類Ⅳ」の「貯蓄している」割合が増えています。

1年間の家計の収支状況



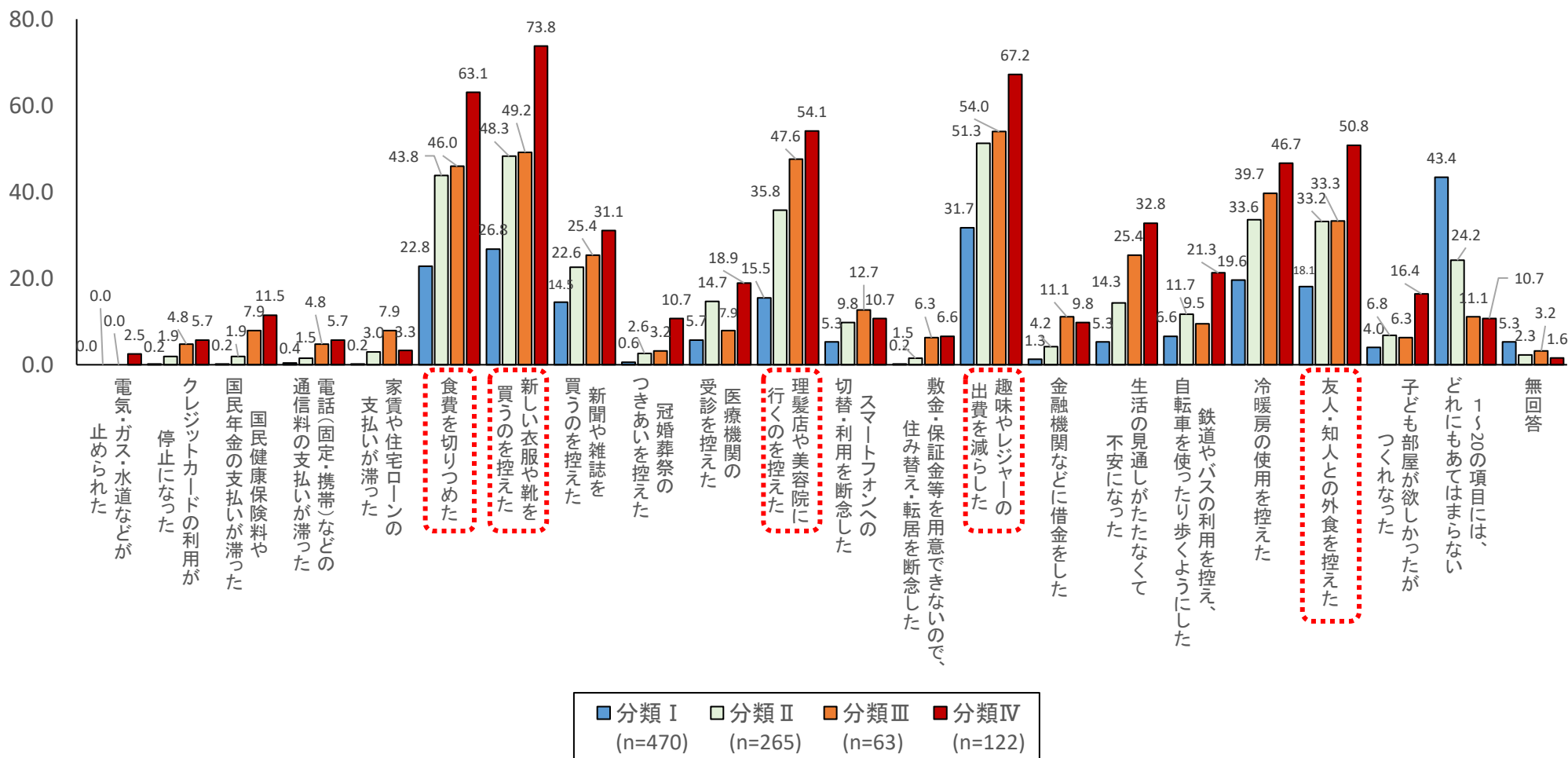
子どもの将来のための貯蓄状況



半年の間に経済的な理由で経験したこと

- ✓ ほとんどの項目で、等価可処分所得が低くなるほど経済的な制限を経験する割合が高くなる傾向があります。
- ✓ 「分類Ⅳ」の半分以上の割合の方が、「新しい衣服や靴を買うのを控えた」「趣味やレジャーの出費を減らした」「食費を切りつめた」「理髪店や美容院に行くのを控えた」「友人・知人との外食を控えた」と回答しています。

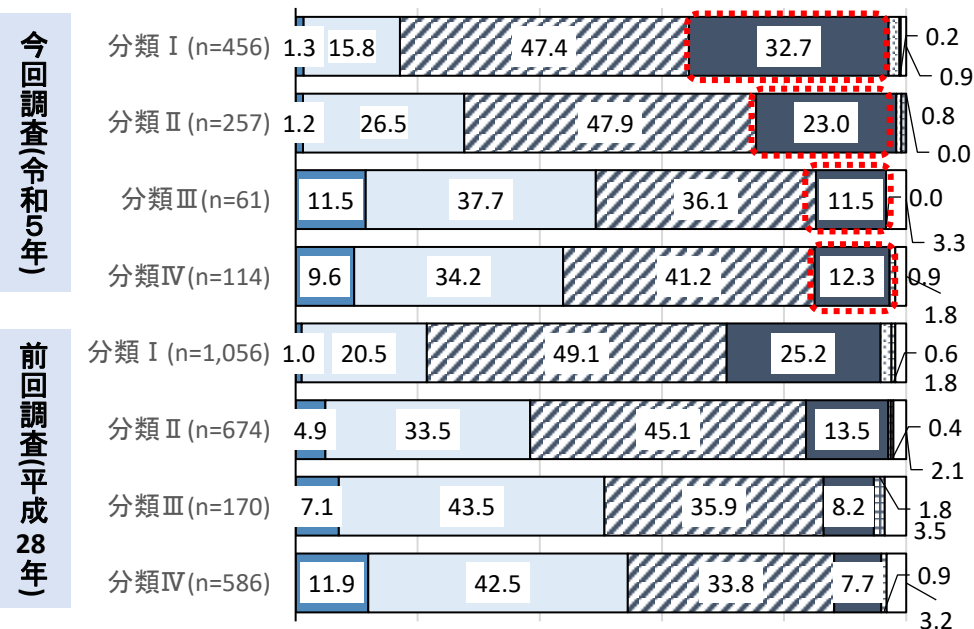
半年の間に経済的な理由で経験したこと



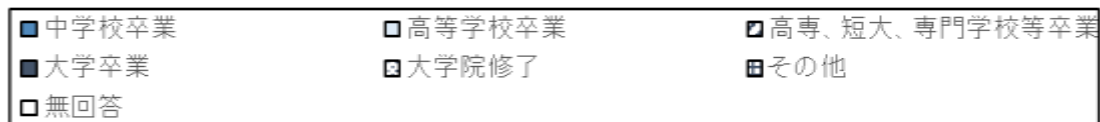
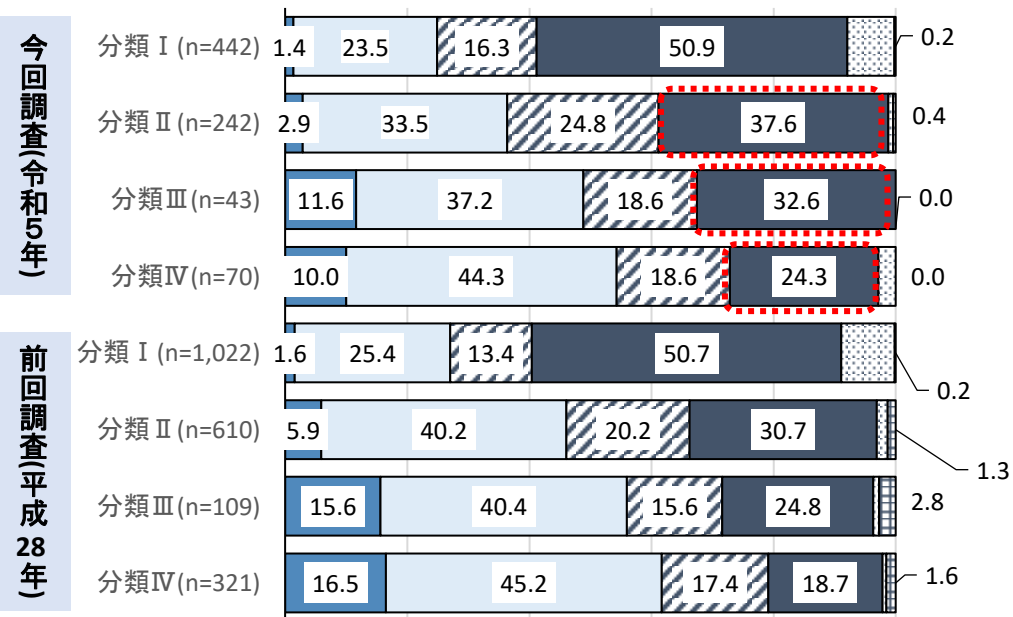
最終学歴

- ✓ 最終学歴について、父親に比べて母親は「大学卒業」の割合が低く、「高専、短大、専門学校等卒業」の割合が高くなっています。また、母親・父親ともに「分類Ⅲ」「分類Ⅳ」の「大学卒業」の割合が低くなっています。
- ✓ 母親の最終学歴は、平成28年時点の調査に比べて、令和5年の調査ではいずれの分類でも「大学卒業」の割合が高くなっています。
- ✓ 父親の最終学歴についても同様に『分類Ⅰ』を除いて、「大学卒業」の割合が高くなっています。

母親の最終学歴



父親の最終学歴

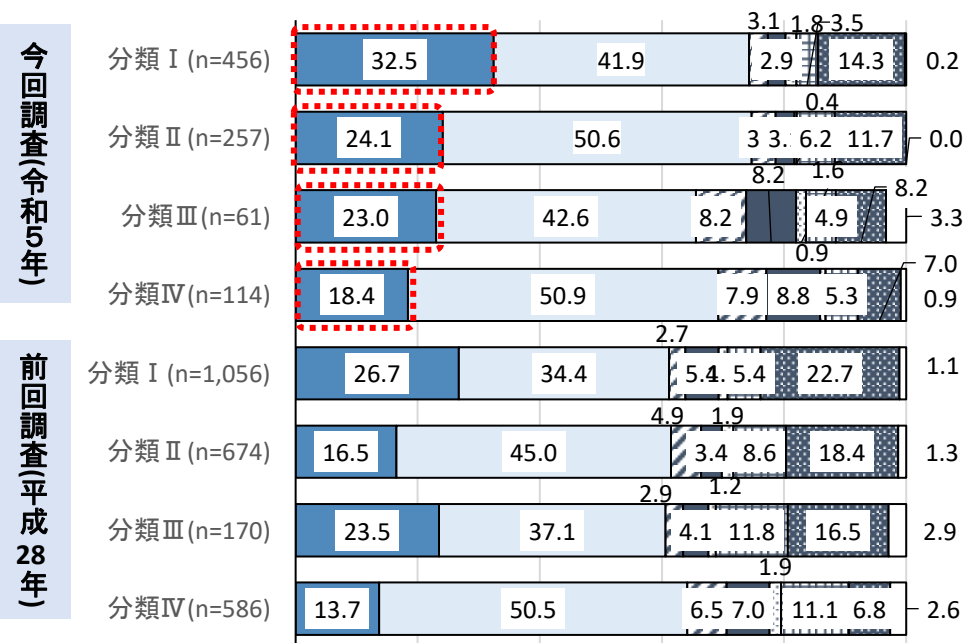


※父親では前回調査において「無回答」が多かったため、無回答を除いた集計で比較しています。

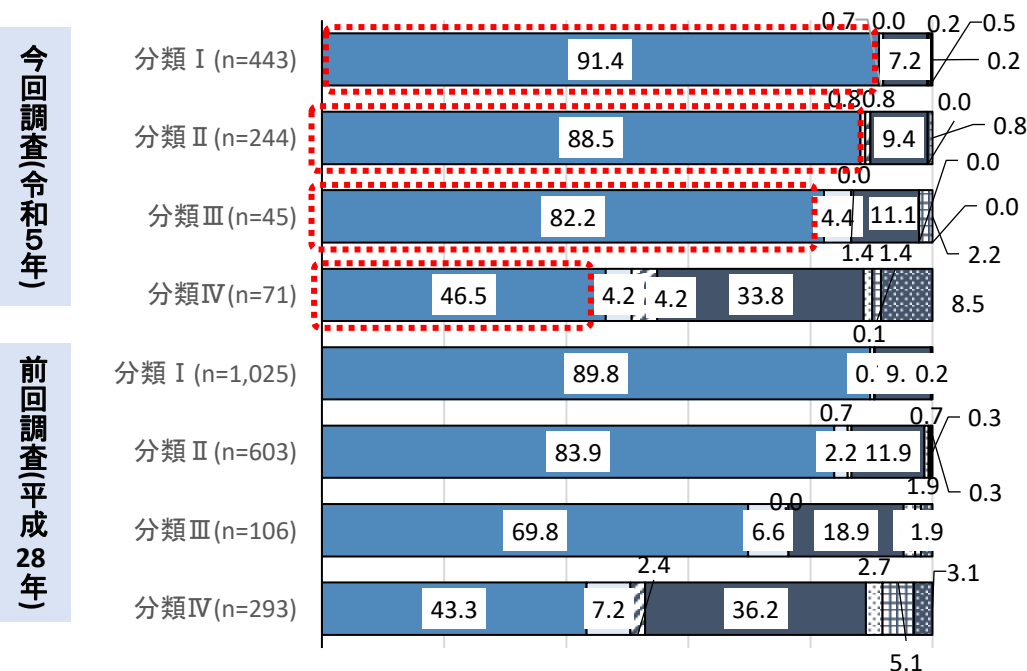
就業状況

- ✓ 就業状況は、父親に比べて母親は「勤め（パートまたはアルバイト、非正規職員）」の割合が非常に高くなっています。また、母親・父親ともに、等価可処分所得が低くなるほど「勤め（常勤・正規職員）」の割合が低くなっています。
- ✓ 平成28年時点の調査と比べて、母親の分類Ⅲを除いて、「勤め（常勤・正規職員）」の割合が上昇しています。

母親の就業状況



父親の就業状況



■ 勤め(常勤・正規職員)

■ 勤め(パートまたはアルバイト、非正規職員で2か所以上に勤務)

□ その他の就業形態

■ 無職で仕事をさがしていない

□ 勤め(パートまたはアルバイト、非正規職員で1か所に勤務)

■ 自営業・家業

■ 無職で仕事をさがしている

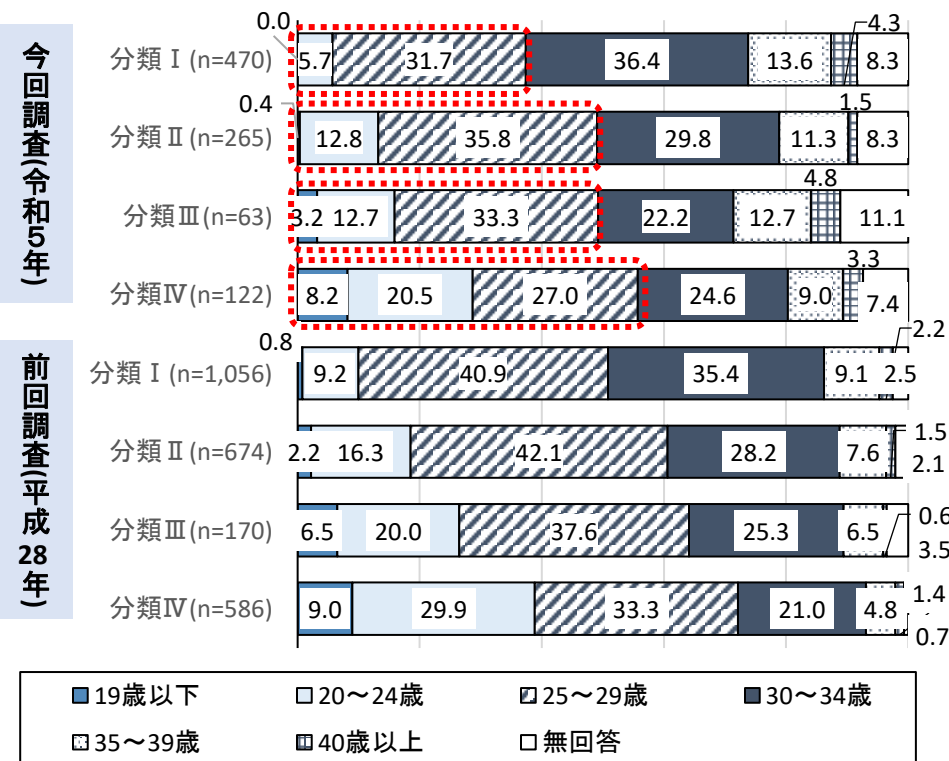
□ 無回答

※父親では前回調査において「無回答」が多かったため、無回答を除いた集計で比較しています。

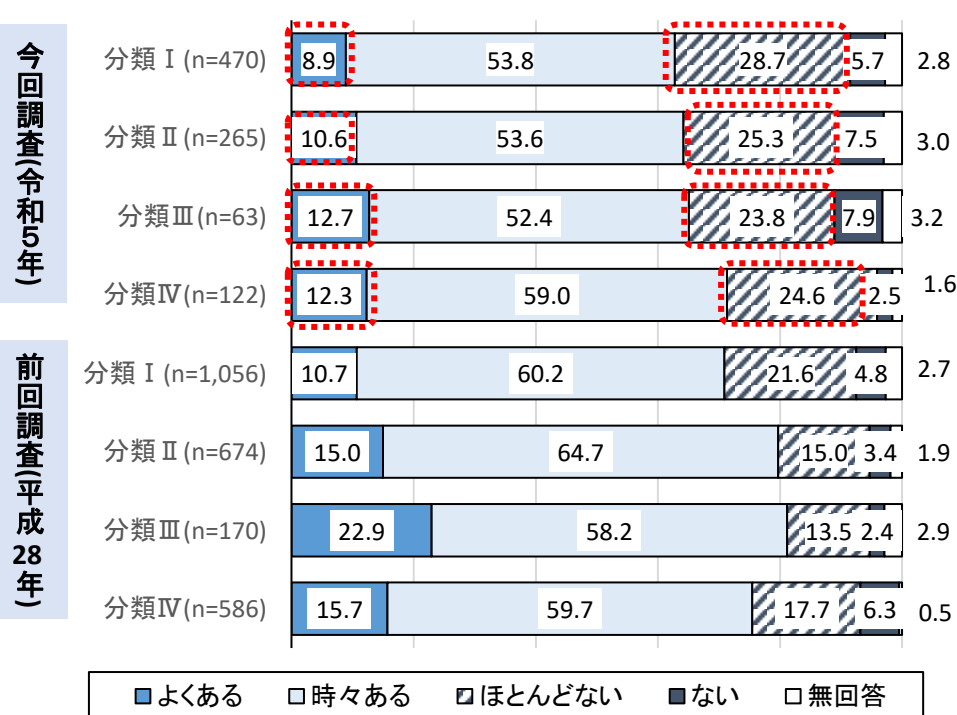
親になった年齢と子どもへの向き合い方

- ✓ 等価可処分所得が低い世帯ほど、初めて親になった年齢が若い傾向にあることは、前回調査と大きく変わりませんが、いずれの分類でも29歳以下の割合が減少しています。
- ✓ 不安やイライラを子どもに向けてしまうことについては、前回調査と比べて「ほとんどない」の割合がどの分類でも増加し、「よくある」の割合が減少しています。

初めて親になった年齢



不安やイライラを子どもに向けてしまうこと

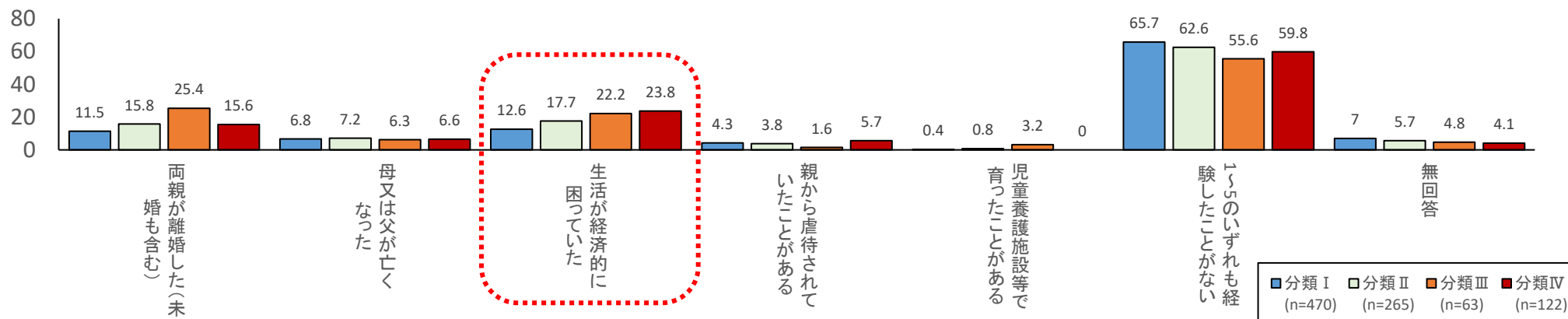


保護者が成人前に経験したこと

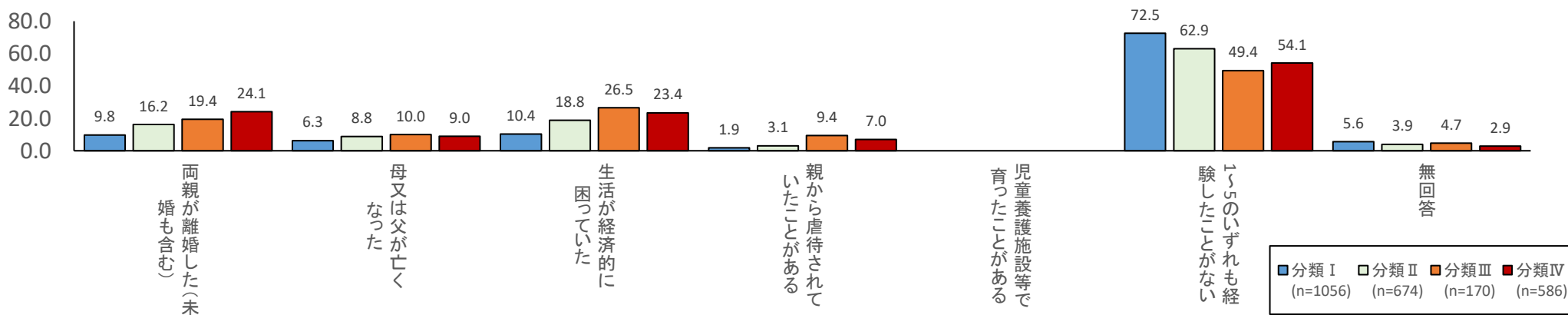
- ✓ 保護者が成人前に経験したことでは、等価可処分所得が低い世帯ほど、「生活が経済的に困っていた」ことを経験している傾向にあり、世代間で連鎖している状況がうかがえます。
- ✓ 前回調査との比較では、大きな傾向の違いは見受けられませんでした。

保護者が成人する前に経験したこと

今回調査(令和5年)



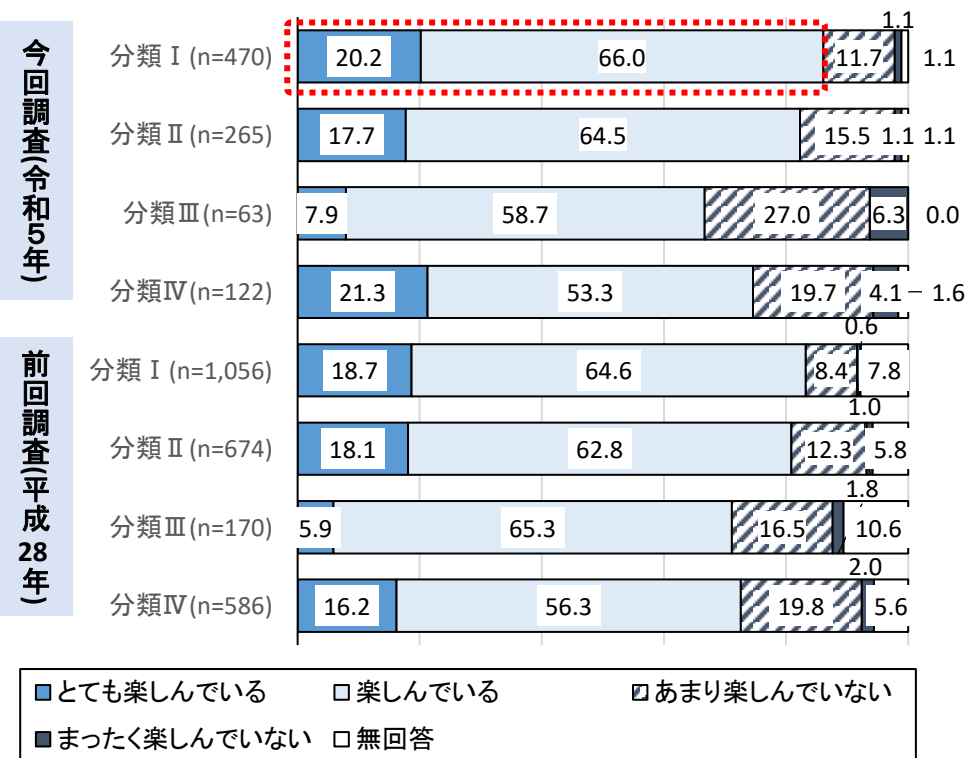
前回調査(平成28年)



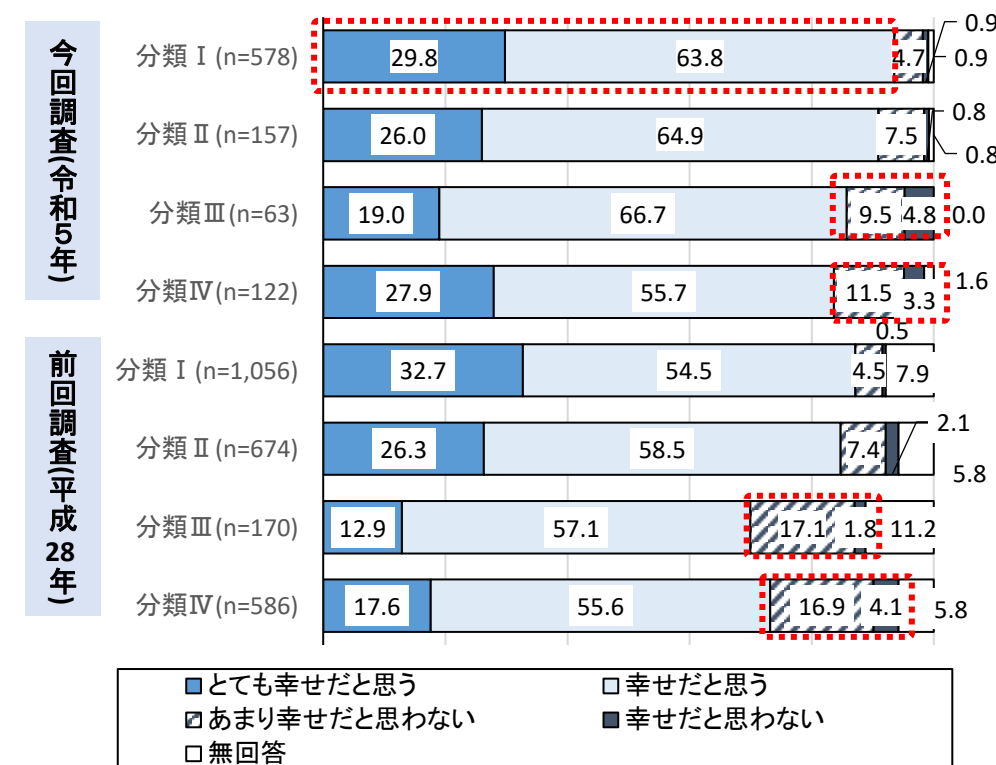
保護者の生活の楽しみ・幸福度

- ✓ 生活の楽しみや幸福度では、「とても楽しんでいる」と「楽しんでいる」の合計や「とても幸せ」と「幸せ」の合計は、概ね、等価可処分所得が低くなるほどその割合は低くなる傾向にあります。
- ✓ 前回調査と比較すると、全体の傾向としては大きな違いはありませんが、幸福度に関しては『分類Ⅲ～Ⅳ』の「あまり幸せだと思わない」「幸せだと思わない」の割合が低くなっています。

生活を楽しんでいるか



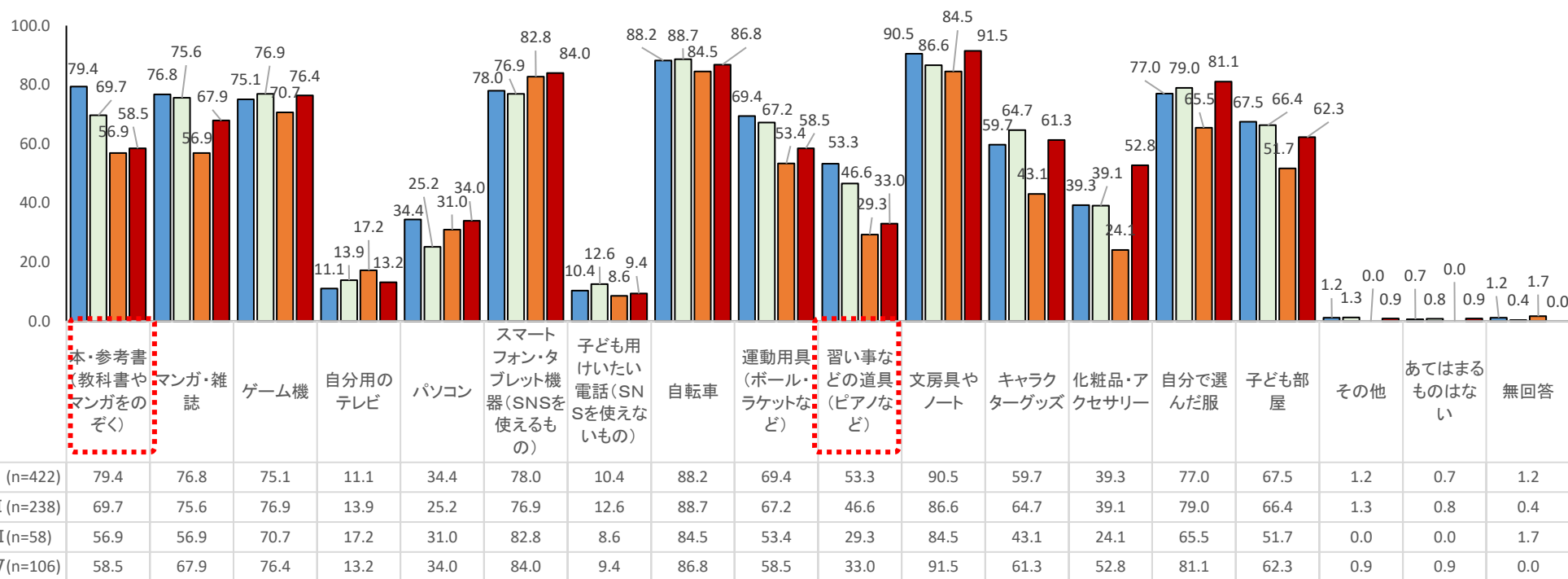
幸福度



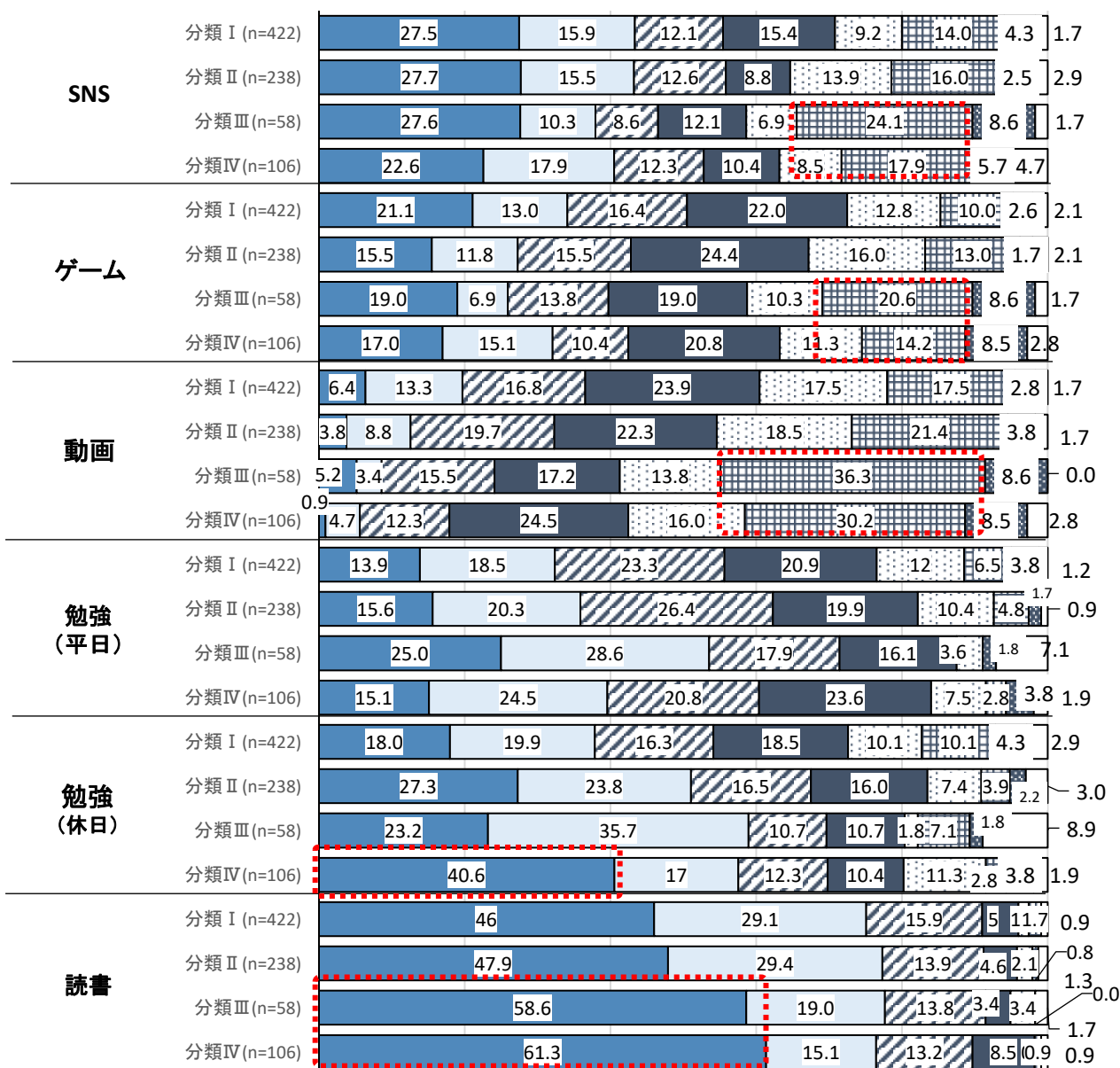
子どもの持ち物・使用できるもの

- ✓ 「本・参考書」「習い事などの道具」等は、『分類Ⅰ～Ⅱ』に比べて『分類Ⅲ～Ⅳ』の割合が低くなっています。
- ✓ 一方で、「スマートフォン・タブレット機器（SNSを使えるもの）」「自転車」「文房具やノート」等は、等価可処分所得による関係はみられません。

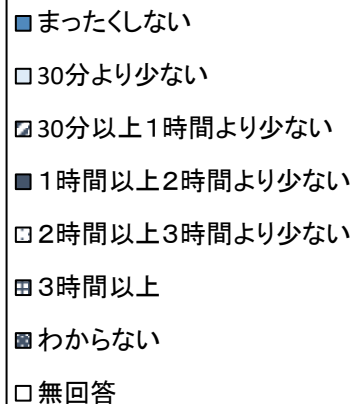
子どもが持っているものや家で自由に使することができるもの



1 日で使う時間



- ✓ 『分類Ⅲ～Ⅳ』はSNSやゲーム、動画に「3時間以上」消費する割合が高く、読書を「まったくしない」割合も高くなっています。
- ✓ また、『分類Ⅳ』は勉強を休日に「まったくしない」割合も高くなっています。

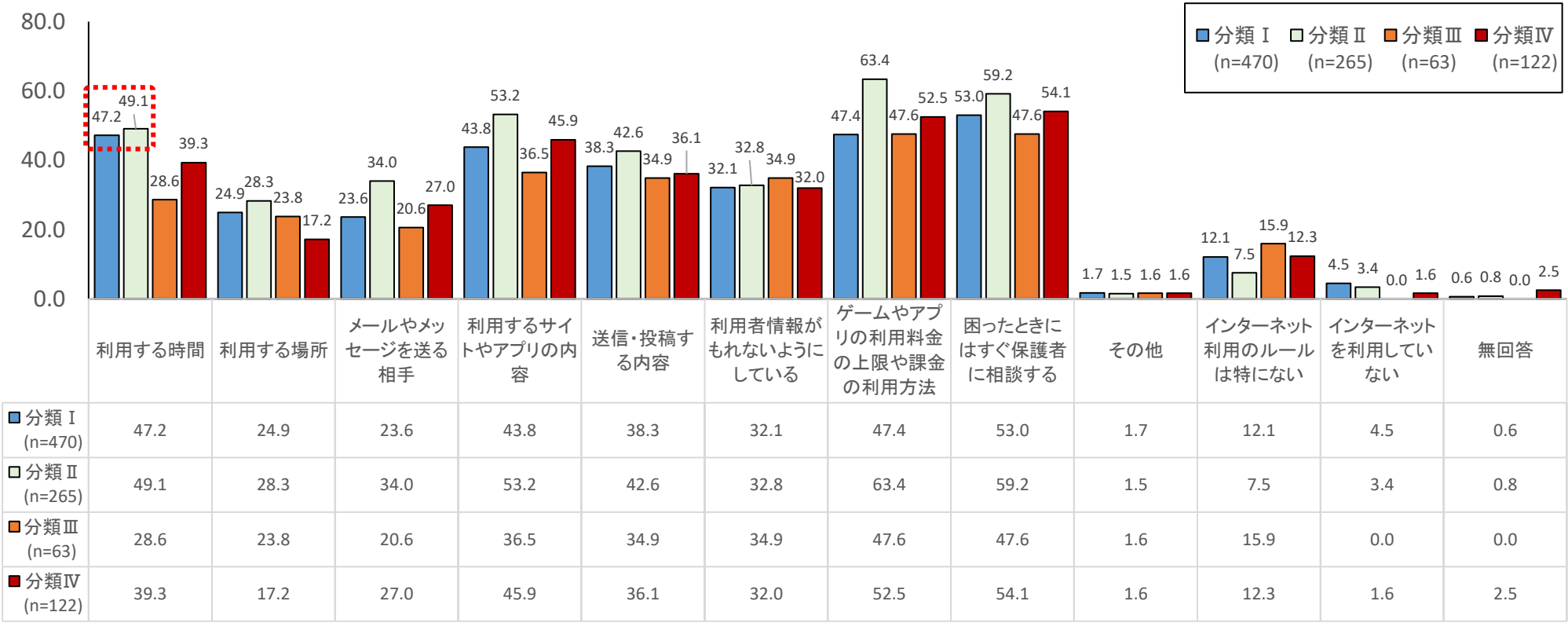


インターネット利用

✓ インターネットの利用に関して、等価可処分所得による明らかな傾向はみられませんが、『分類Ⅰ～Ⅱ』は「利用する時間」のルールを設けている割合がやや高くなっています。

インターネットの利用で設けているルール

今回調査(令和5年)

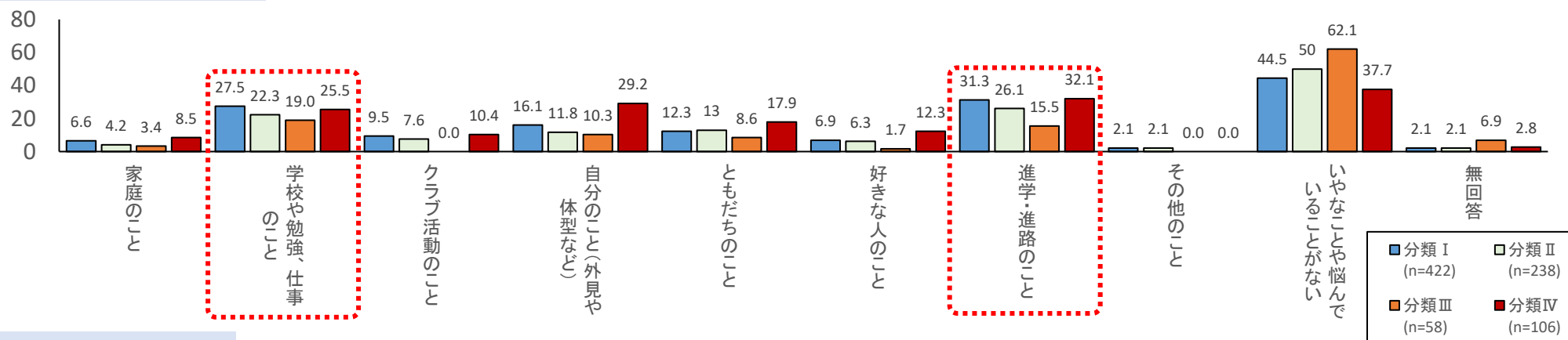


嫌なこと悩んでいること

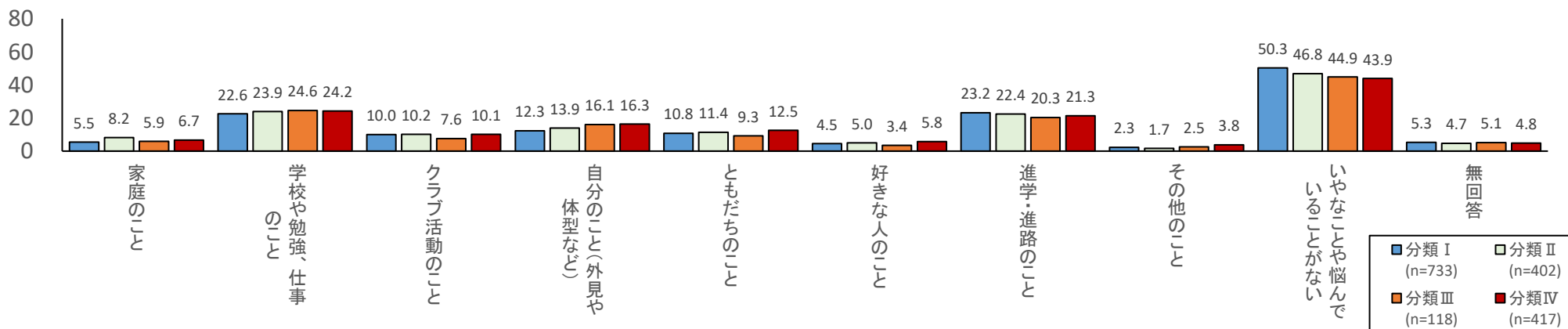
- ✓ 等価可処分所得に関わらず、2～3割程度の子どもが「進学・進路」や「学校や勉強（仕事）」に関して悩んでいます。一方で、「嫌なことや悩んでいることがない」割合は、『分類Ⅳ』の子どもが低くなっています。
- ✓ 平成28年時点の調査と比べると、「進学・進路」で悩んでいる割合は『分類Ⅲ』の子どもを除いて増加し、「自分のこと（外見や体型など）」で悩んでいる割合は「分類Ⅳ」で増加しています。また、「いやなことや悩んでいることがない」の割合は『分類Ⅰ・Ⅳ』で減少しています。

嫌なこと悩んでいることの有無

今回調査(令和5年)



前回調査(平成28年)

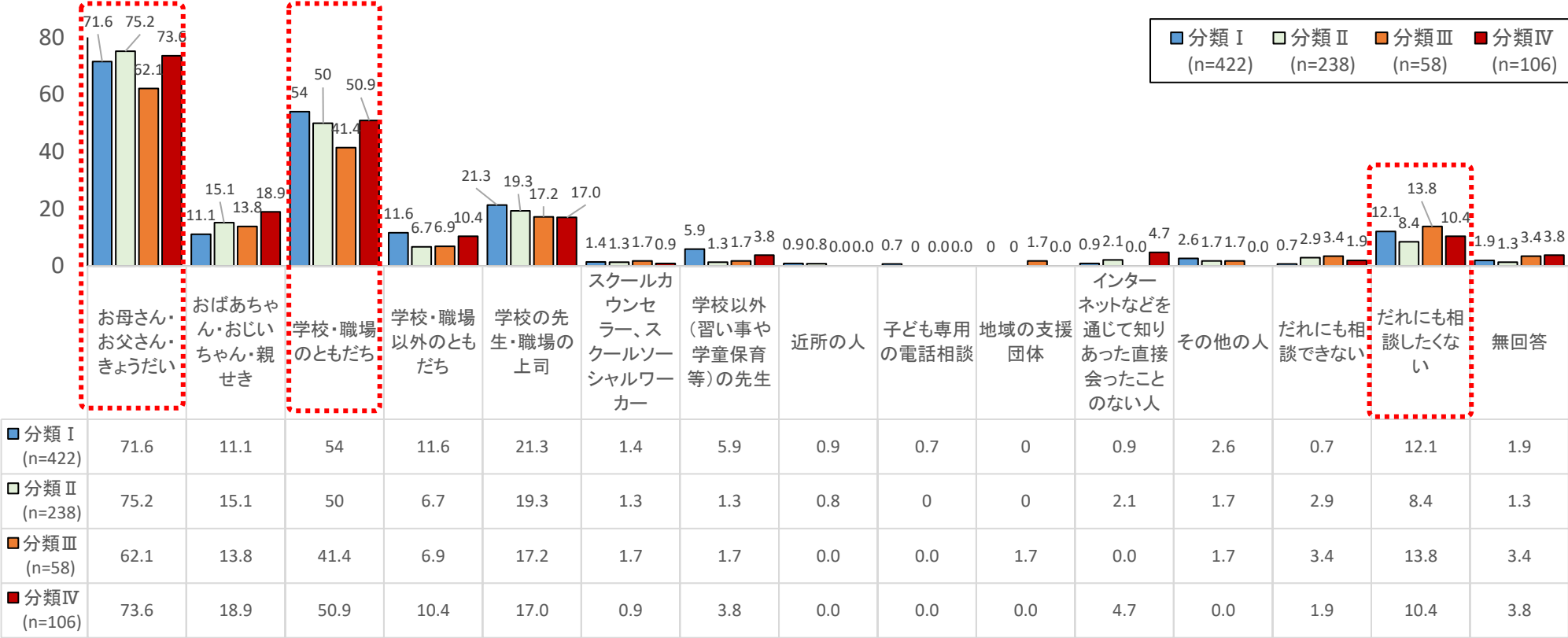


子どもの相談先

- ✓ いずれの項目も、等価可処分所得による明らかな傾向の違いは見受けられません。
- ✓ 回答割合は、「お母さん・お父さん・きょうだい」が最も高く、次いで「学校・職場のともだち」が高くなっています。また1割程度は「誰にも相談したくない」と答えています。

嫌なことや悩んでいることがあるときの相談先

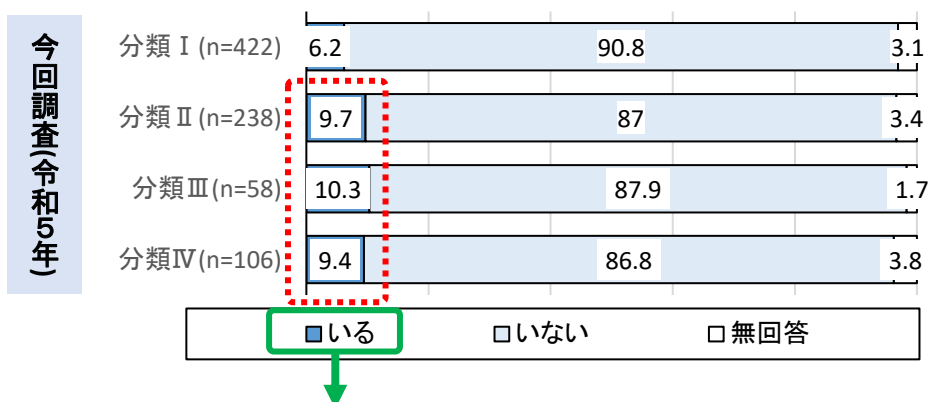
今回調査(令和5年)



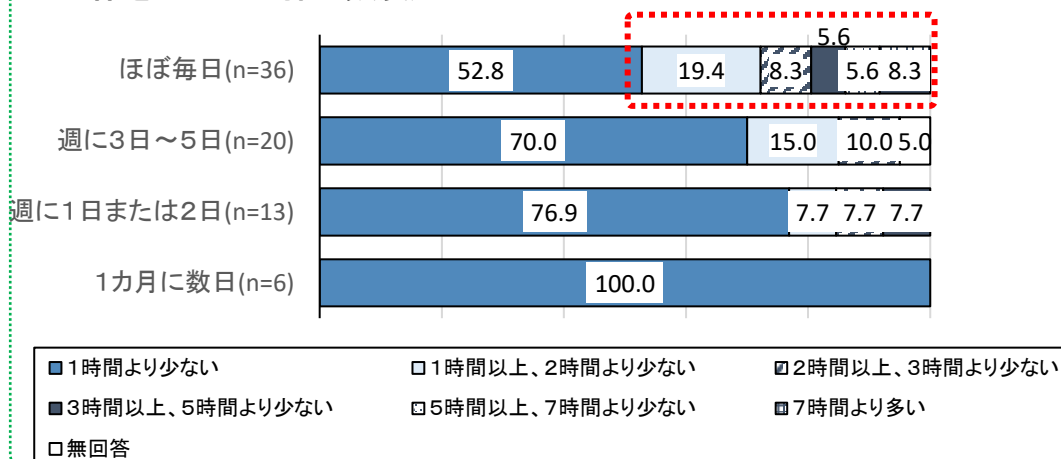
ヤングケアラー

- ✓ 『分類Ⅰ』に比べると、『分類Ⅱ～Ⅳ』では、自分が世話をしている家族が「いる」割合がやや高くなっています。
- ✓ お世話を『ほぼ毎日』している人は、およそ5割が「1時間以上」お世話をしていると回答しています。
- ✓ 必要なサポート・支援としては、「特にない」が47.6%と最も高い一方で、「勉強のサポート」が34.1%と次いで高くなっています。

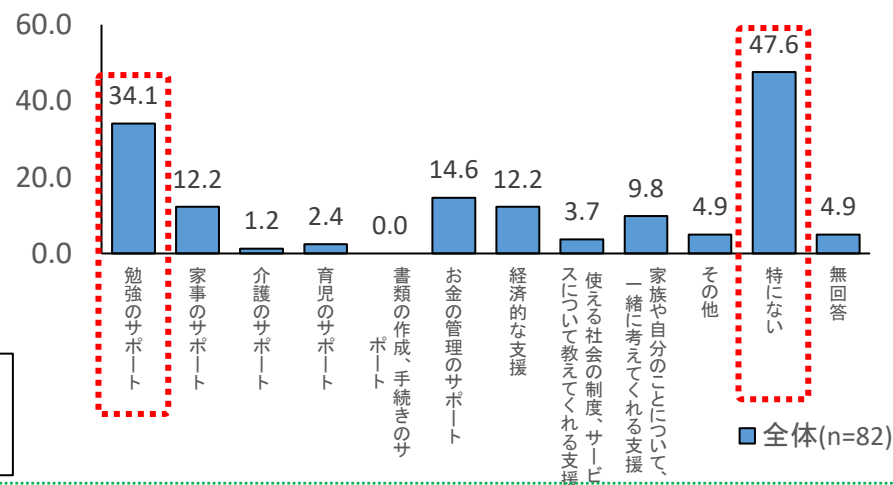
自分が世話をしている家族の有無



お世話をしている時間(頻度別)



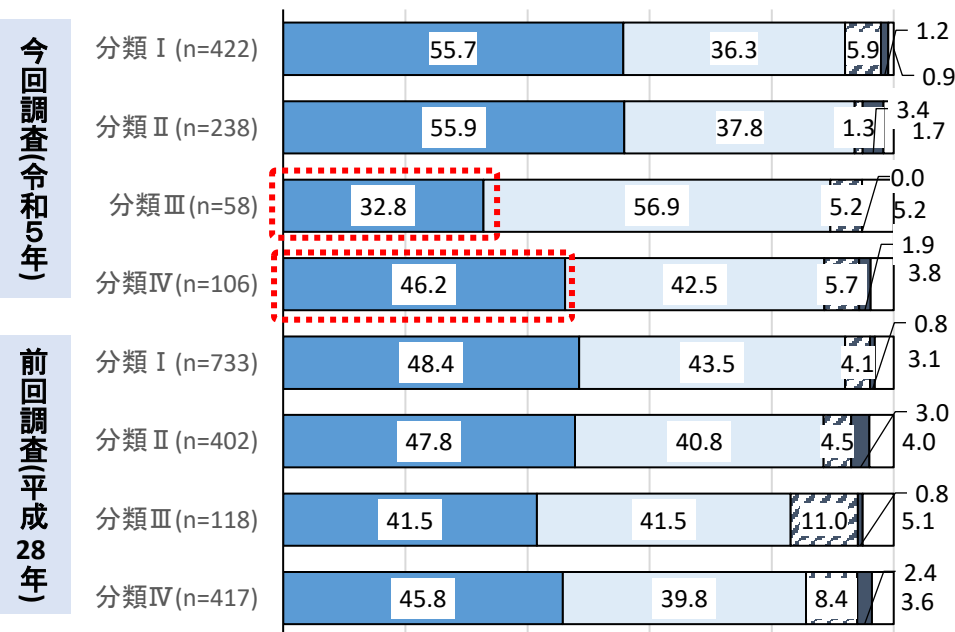
必要なサポート・支援



子どもの幸福度と自分への自信

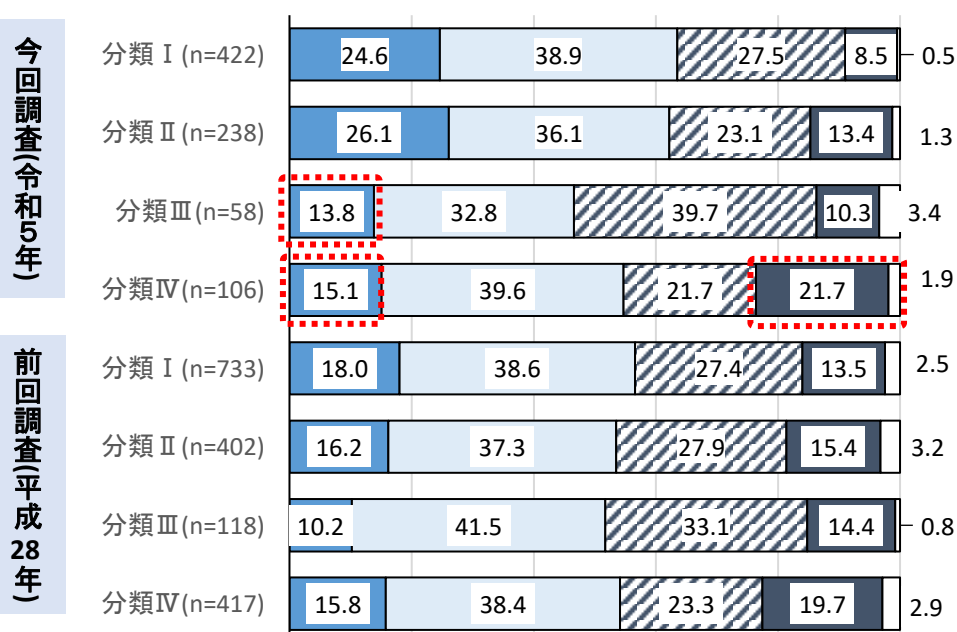
- ✓ 幸福度では、約9割の子どもが「とても幸せ」「幸せ」と回答していますが、『分類Ⅲ～Ⅳ』は「とても幸せ」の割合がやや低くなっています。
- ✓ 自分への自信では、半分程度の子どもが「ある」「どちらかというところ」と回答していますが、『分類Ⅲ～Ⅳ』は「ある」の割合がやや低く、『分類Ⅳ』は「ない」の割合が高くなっています。
- ✓ 前回調査と比較すると、『分類Ⅰ～Ⅱ』は、幸福度の「とても幸せだと思う」と自分への自信が「ある」と回答した割合が増加しています。

幸福度



☒ とても幸せだと思う ☐ 幸せだと思う ☐ あまり幸せだと思わない
☒ 幸せだと思わない ☐ 無回答

自分への自信



☒ ある ☐ どちらかというところ ☐ どちらかというところない ☐ ない ☐ 無回答

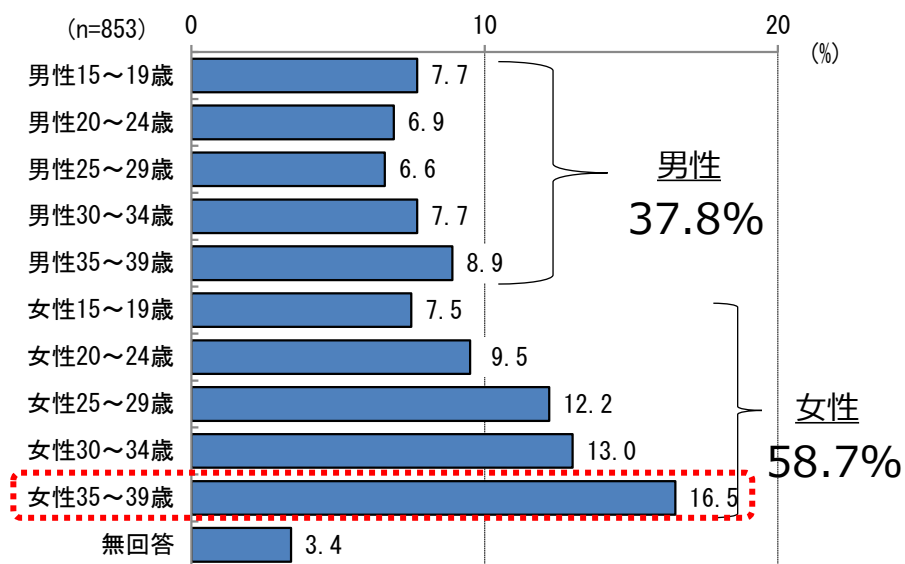
C 子ども・若者の意識及び少子化社会に関する調査



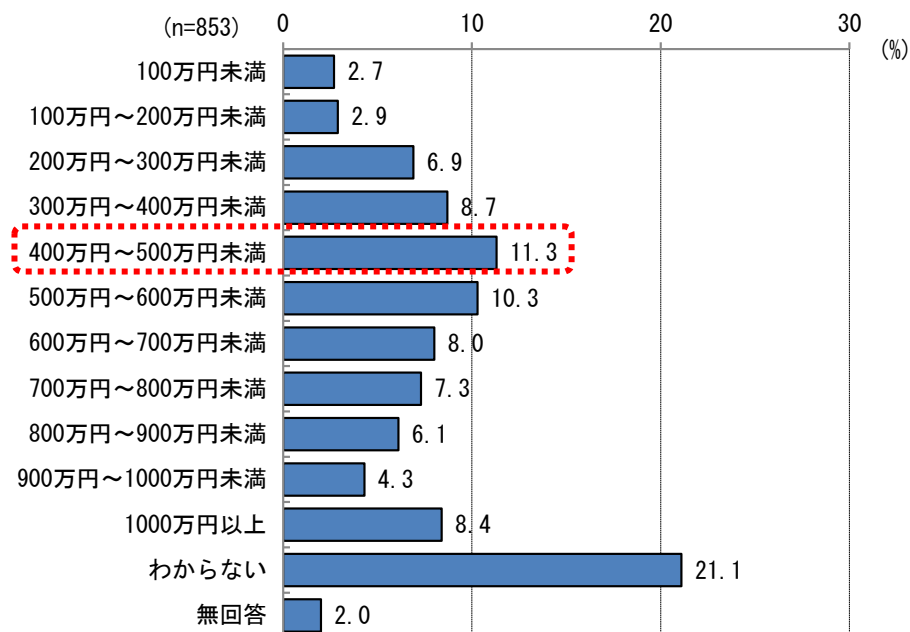
性別・年齢と世帯収入

- ✓ 回答者は「女性」が58.7%、「男性」が37.8%と女性が多い傾向にあり、特に「35～39歳」の女性の回答率が最も高くなっています。
- ✓ 世帯年収は、「わからない」を除くと「400～500万円未満」が11.3%と最も高くなっています。

性別・年齢



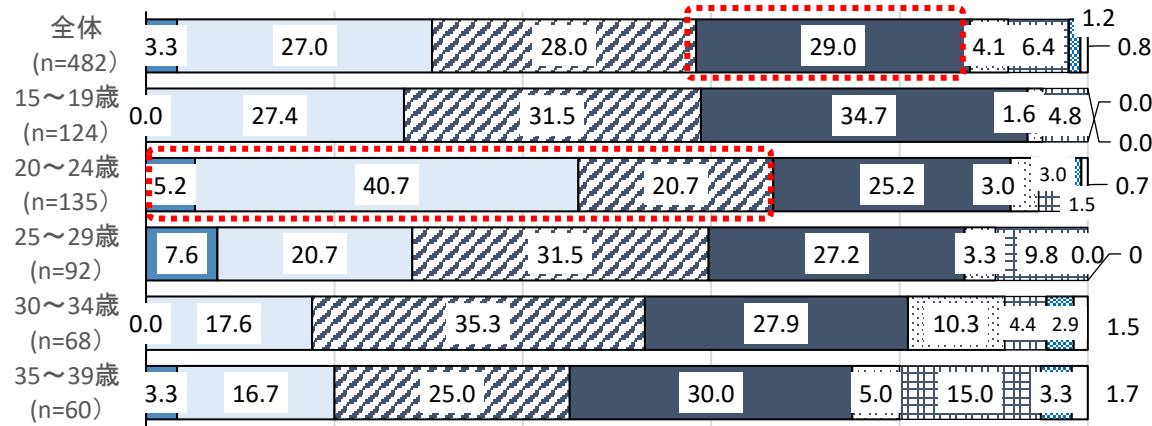
世帯年収



結婚に対する考え方

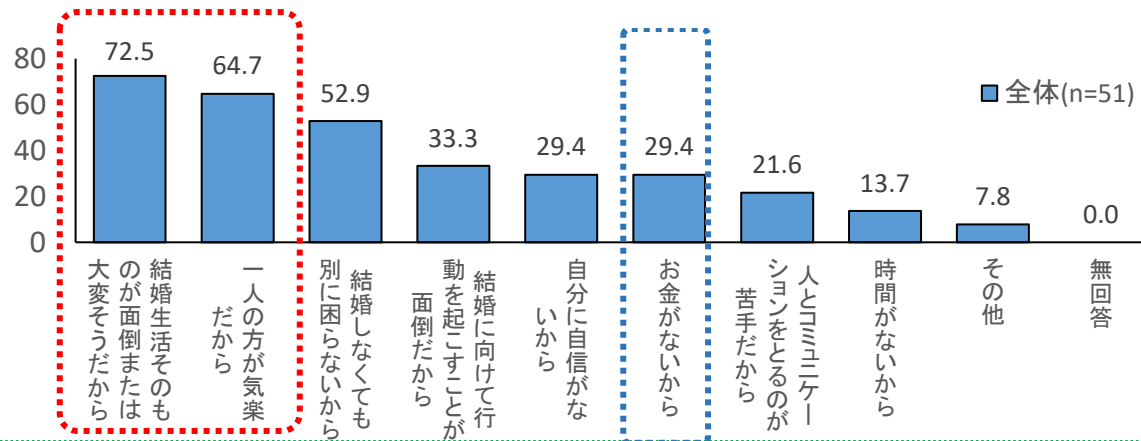
- ✓ 結婚願望に対して、全体の29.0%が「どちらでもいいと思う」と回答し、結婚を希望する割合は、『20～24歳』が最も高くなっています。
- ✓ 結婚を希望しない理由としては、「結婚生活そのものが面倒または大変そうだから」「一人の方が気楽そうだから」という結婚に対して否定的なイメージが高くなっている一方、「お金がないから」という理由は比較的低くなっています。

今後の結婚願望(年齢別)



- 現在、既に予定がある・決まっている
- 現在、予定はないが是非したい
- ▨ 現在、予定はないができればしたい
- どちらでもいいと思う
- ▨ できればしたくない
- したくない
- その他
- 無回答

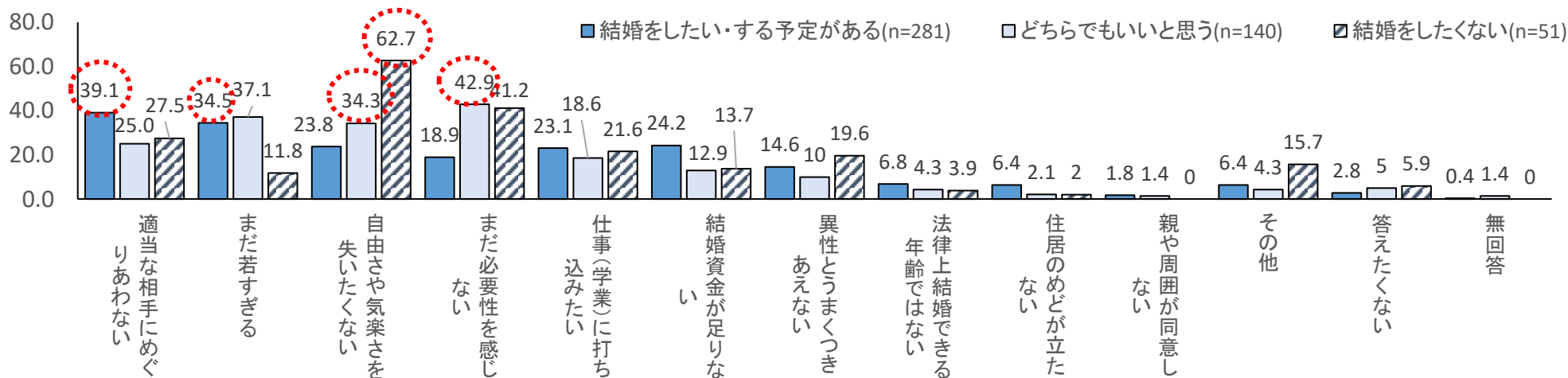
結婚を希望しない理由



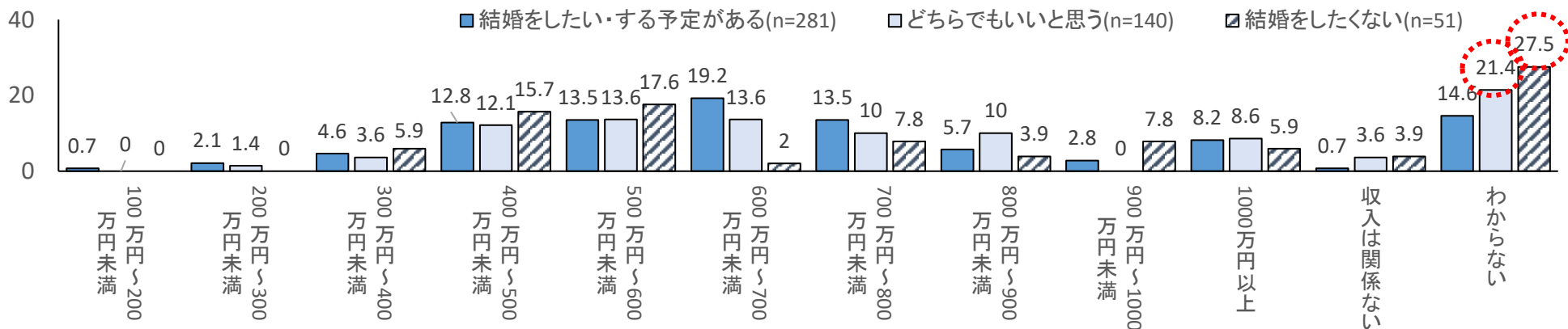
結婚に対する考え方

- ✓ 結婚に対する考え方ごとに、結婚していない理由を見ると、『結婚をしたくない』人は、「自由さや気楽さを失いたくない」こと、『結婚したい・する予定がある』人は「適当な相手にめぐりあわない」や「まだ若すぎる」こと、『どちらでもいいと思う』人は「まだ必要性を感じない」ことを理由としています。
- ✓ 結婚に必要な世帯収入は、『結婚をしたくない』や『どちらでもいいと思う』人ほど「わからない」の回答が高く、具体的に考えられていません。

結婚していない理由(結婚に対する考え方別)



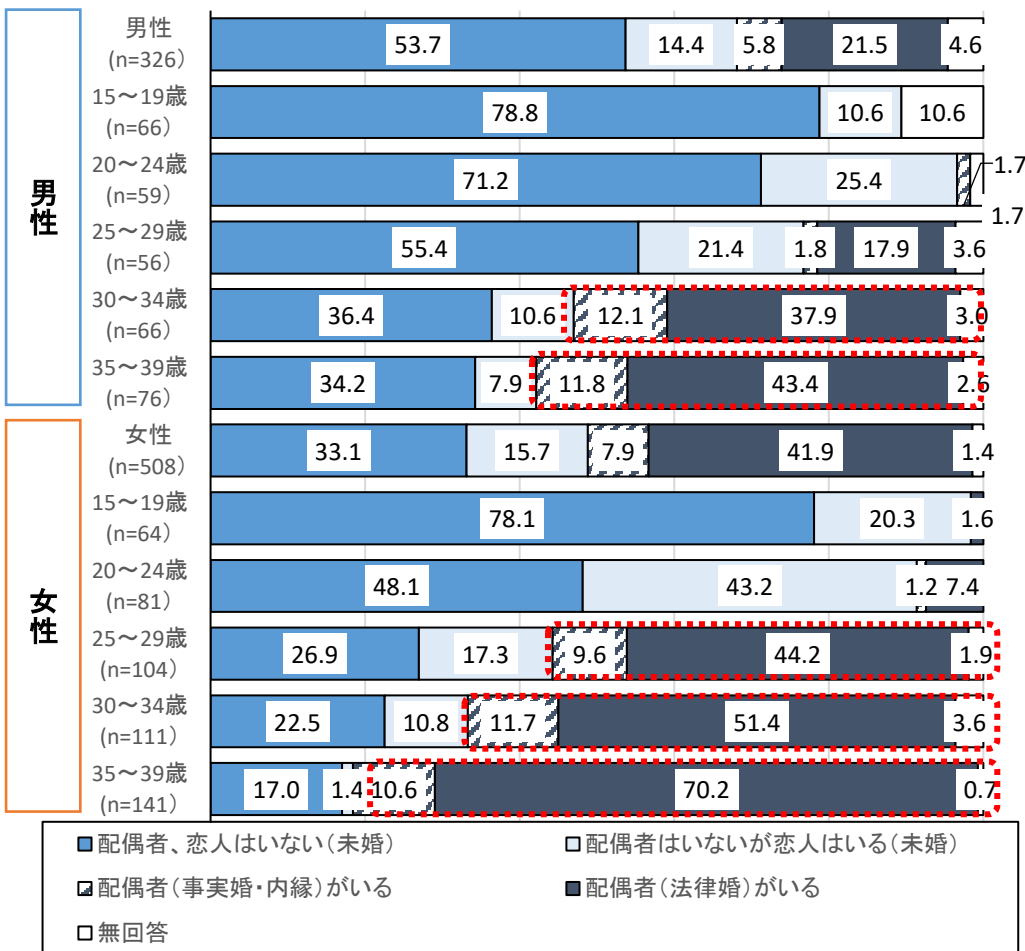
結婚に必要な世帯収入(結婚に対する考え方別)



婚姻と子どもの状況

- ✓ 「配偶者あり」の回答率は、男性は30歳以上で5割以上となり、女性は25歳以上で5割以上、30～34歳で6割以上、35～39歳で8割以上となっています。
- ✓ 男女ともに年齢が高くなるほど「子どもはいない」の割合が概ね減少傾向にありますが、男性と女性を比べると男性の方が『35～39歳』においても「子どもがない」割合が高くなっています。

配偶者の有無



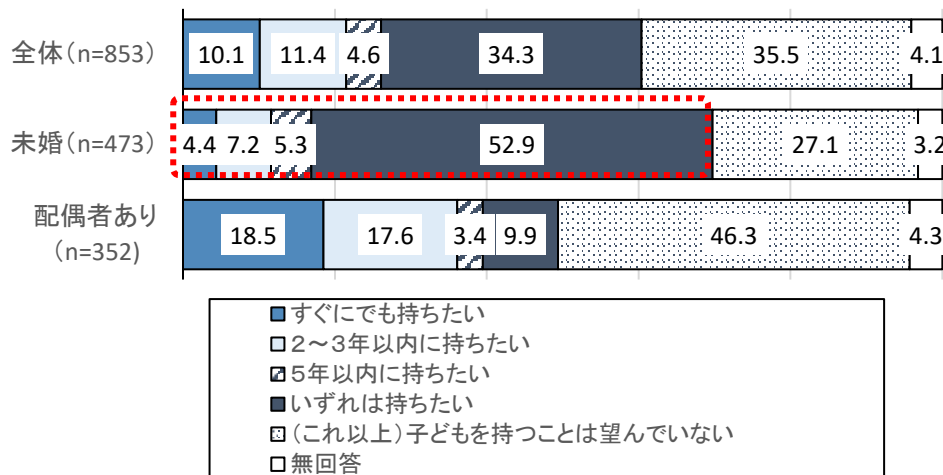
子どもの有無

	回答者数	子どもはいない	ナゴ自身が現在または妊娠中	いる1歳未満の子どもが	(未就学児)の子どもが	小学生の子どもがいる	中学生以上の子どもが	無回答
男性	326	72.7	1.8	4.0	16.0	7.7	1.8	3.4
15～19歳	66	90.9	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	7.6
20～24歳	59	93.2	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0	5.1
25～29歳	56	83.9	1.8	3.6	10.7	0.0	0.0	0.0
30～34歳	66	54.5	4.5	9.1	27.3	6.1	0.0	4.5
35～39歳	76	50.0	1.3	6.6	36.8	26.3	5.3	0.0
女性	508	54.7	2.2	9.3	27.4	15.9	4.5	1.2
15～19歳	64	96.9	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	1.6
20～24歳	81	88.9	1.2	3.7	3.7	0.0	0.0	2.5
25～29歳	104	61.5	4.8	20.2	18.3	3.8	0.0	0.0
30～34歳	111	45.0	1.8	9.0	42.3	12.6	3.6	0.9
35～39歳	141	21.3	2.1	9.2	48.9	41.8	9.9	1.4

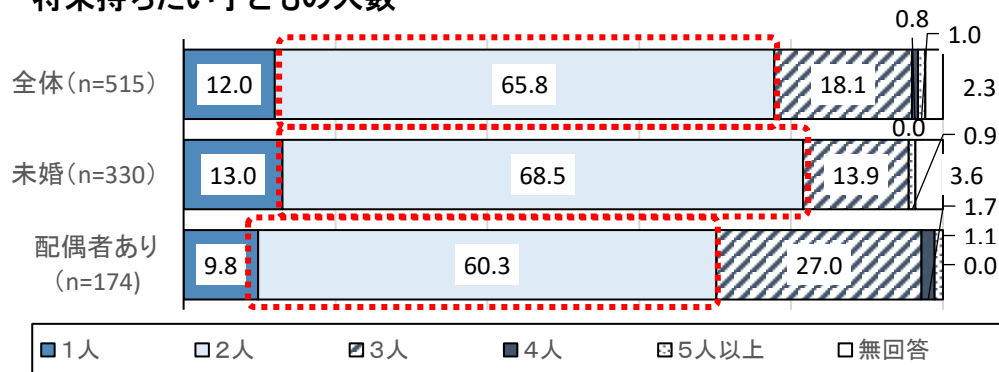
子どもを持つことに対する考え方

- ✓ 子どもを持ちたいかの希望は、『未婚』の人でも約7割の人が「持ちたい」と回答しています。
- ✓ 将来持ちたい子どもの人数は、『未婚』と『配偶者あり』にかかわらず、6割以上が「2人」と回答しています。
- ✓ 重要と思う子育てを支援する施策は、『未婚』と『配偶者あり』にかかわらず、経済的な支援や保育サービスの充実が高くなっています。

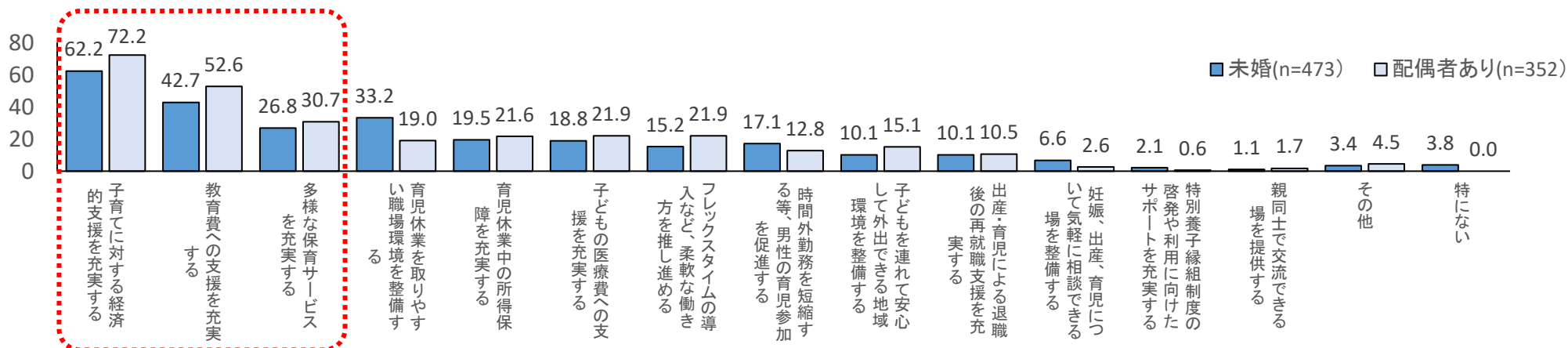
子どもを持ちたいかの希望(婚姻状況)



将来持ちたい子どもの人数



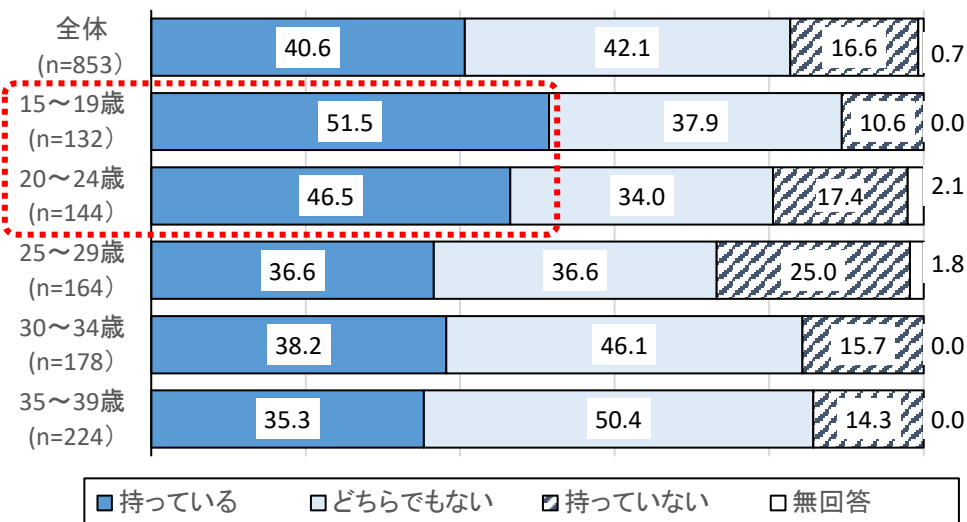
重要と思う子育てを支援する施策



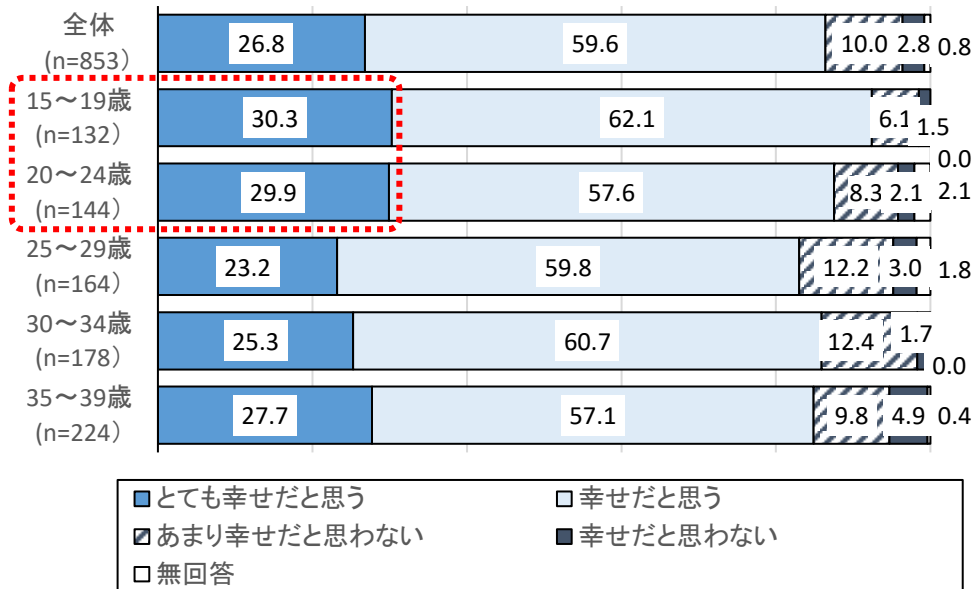
将来に対する希望と幸福度

- ✓ 将来に対する希望を持っている人や、幸福度が高い人は、『15～19歳』『20～24歳』の若い世代で多くみられます。
- ✓ 将来に対する希望の有無別で幸福度を見ると、『将来への希望を持っている』人の幸福度は高くなっています。

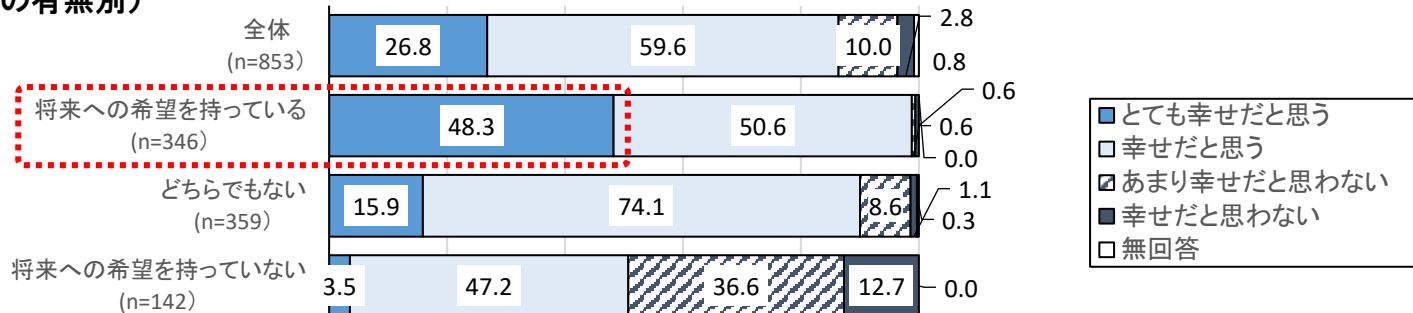
将来に対する希望を持っているか



幸福度



幸福度(将来に対する希望の有無別)

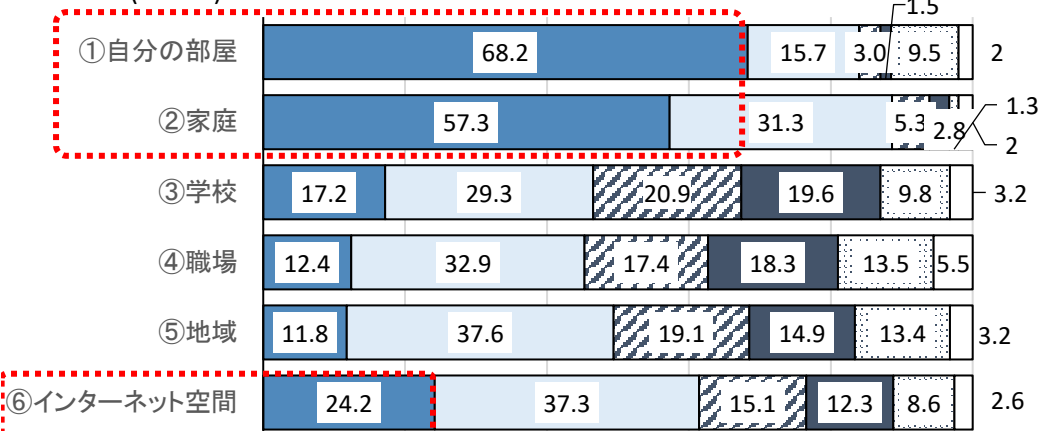


自分の居場所の有無

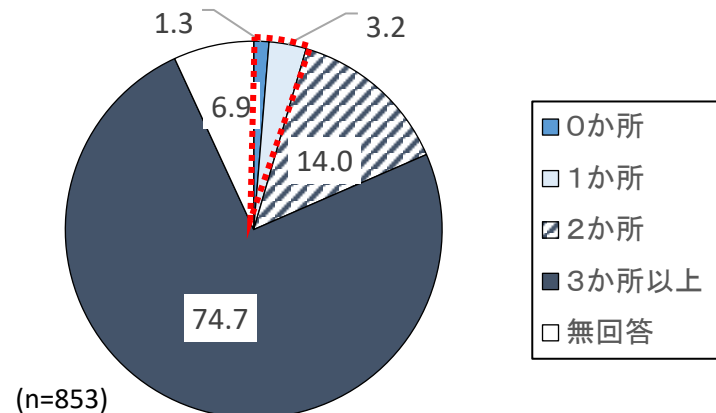
- ✓ 自分の居場所と感ずる場所は『自分の部屋』や『家庭』、『インターネット空間』が高くなっています。また、居場所が「0か所」の人が1.3%、「1か所」の人が3.2%となっています。

自分の居場所になっているか

(n=853)



自分の居場所と思うものの数

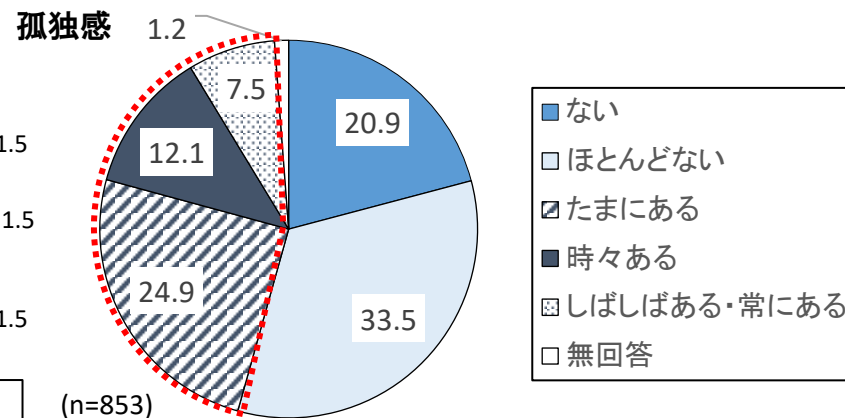
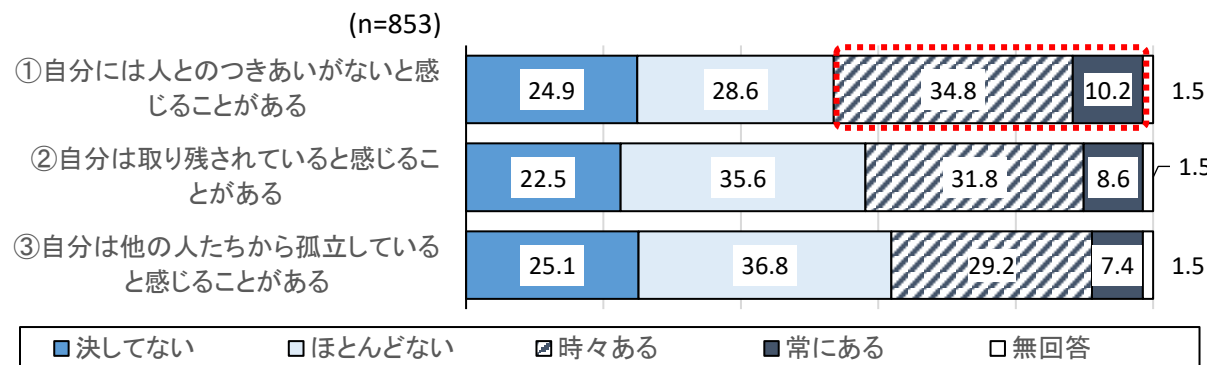


- そう思う
- どちらかといえば、そう思う
- ▨ どちらかといえば、そう思わない
- そう思わない
- ▨ あてはまるものはない、わからない
- 無回答

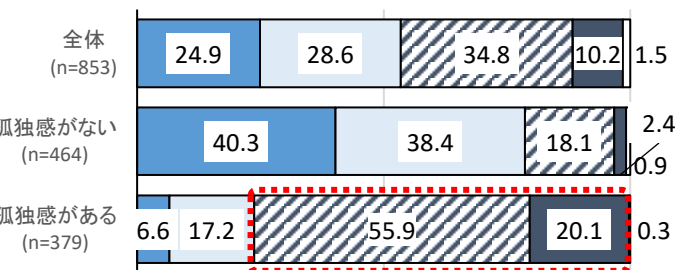
孤立・孤独感

- ✓ 「自分には人とのつきあいが無いと感じることがある」人は全体で45.0%であり、孤独感を持っている人は全体で44.5%となっています。
- ✓ 孤独感がある人のうち7割以上が、①②③の状況で孤立を感じています。

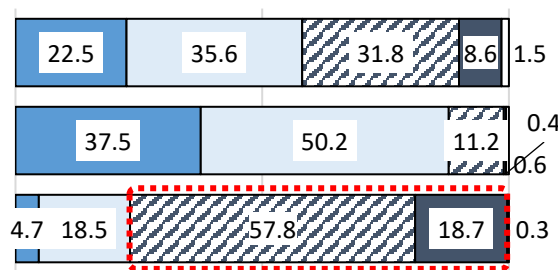
孤立を感じる状況



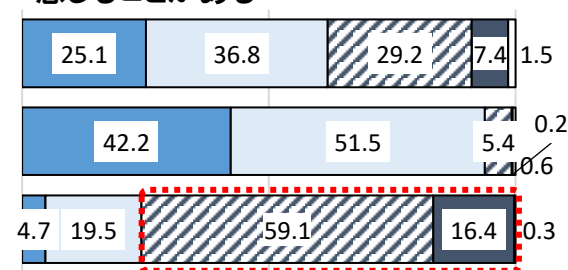
①自分には人とのつきあいが無いと感じることがある



②自分は取り残されていると感じることがある



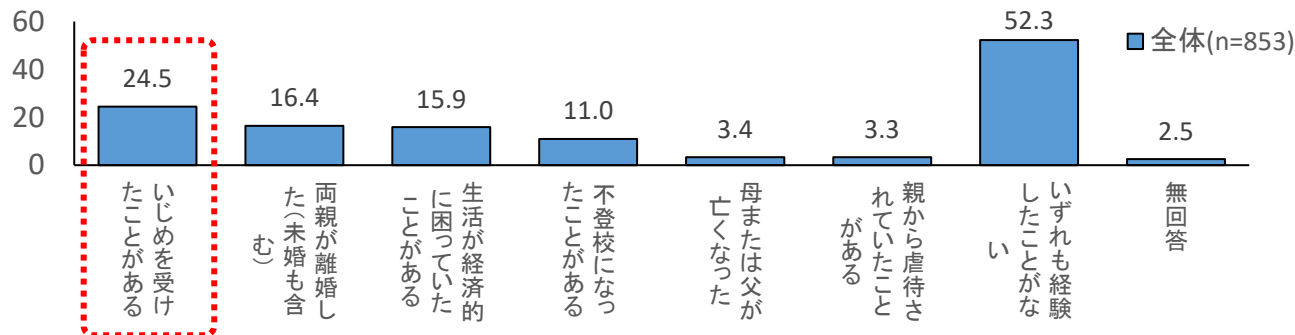
③自分は他の人たちから孤立していると感じることがある



成人前の経験

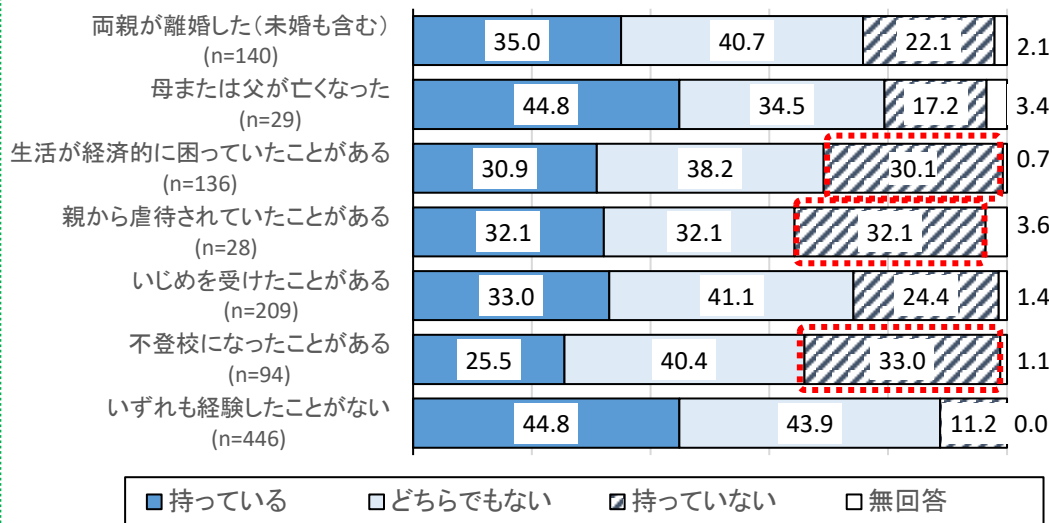
- ✓ 成人前に経験したこととして、「いずれも経験したことがない」が52.3%、ついで「いじめを受けたことがある」が24.5%となっています。
- ✓ 『生活が経済的に困っていたことがある』『親から虐待されていたことがある』『不登校になったことがある』人のうち、将来への希望を「持っていない」と回答した人が30%以上、幸福度について「あまり幸せだと思わない」「幸せだと思わない」と回答した人が25%以上となっています。

成人前に経験したこと

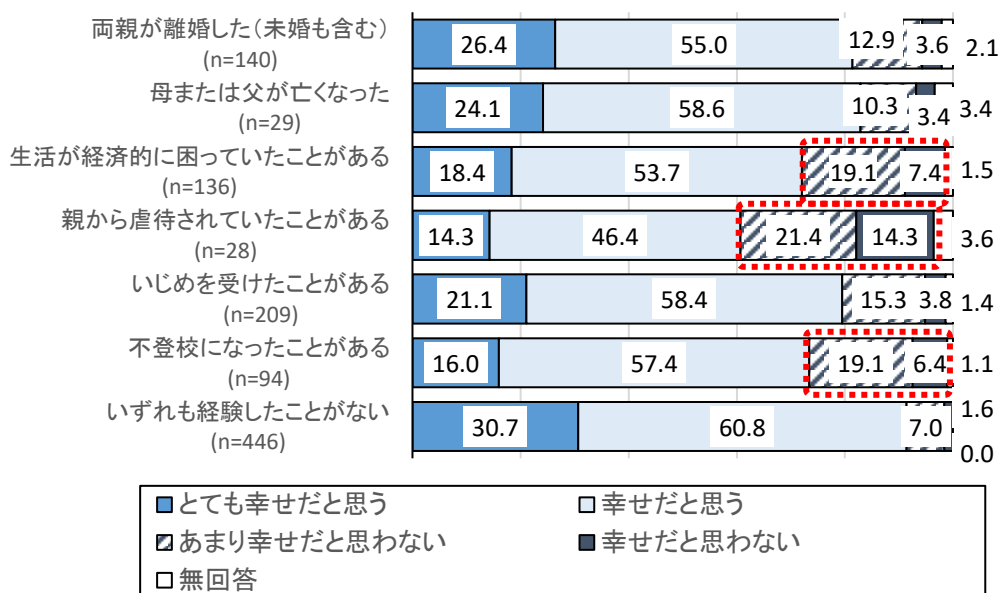


成人前に経験したことによる影響

将来への希望の有無



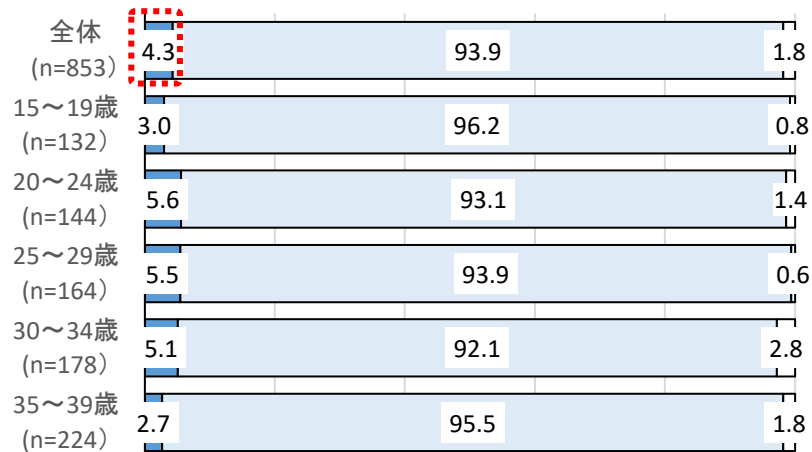
幸福度



ヤングケアラー

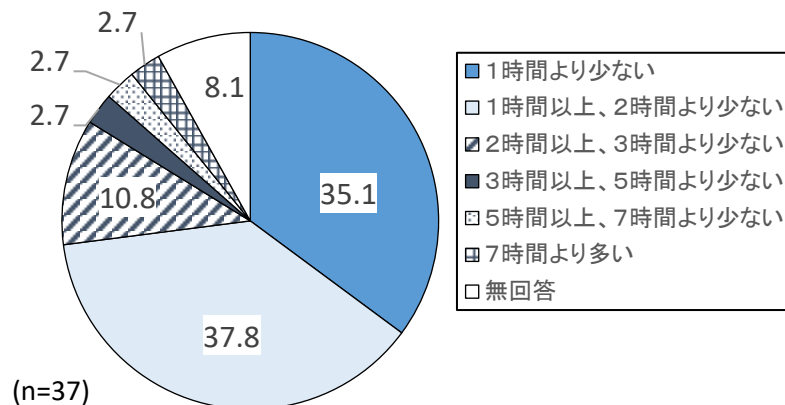
- ✓ 未成年で家族の世話をしていた（している）経験は、全体の4.3%の人が「ある」と回答しています。
- ✓ 欲しかった（欲しい）サポート・支援として、「経済的な支援」「使える社会の制度、サービスについて教えてくれる支援」「家族や自分のことについて、一緒に考えてくれる支援」が高くなっています。

未成年で家族の世話をしていた（している）経験



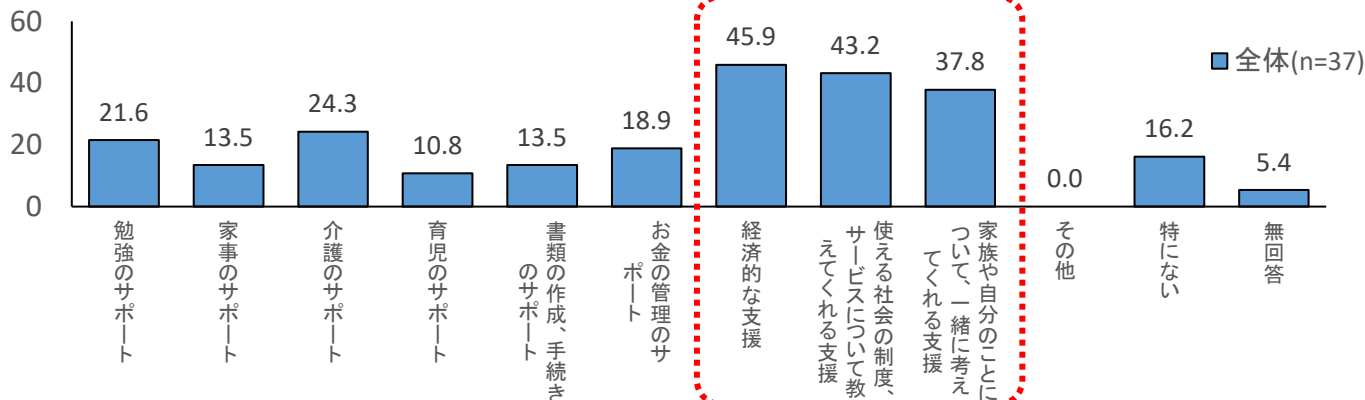
■ある（現在未成年で今もしている場合を含む） □ない □無回答

世話をしていた時間



- 1時間より少ない
- 1時間以上、2時間より少ない
- ▨ 2時間以上、3時間より少ない
- 3時間以上、5時間より少ない
- ▨ 5時間以上、7時間より少ない
- ▨ 7時間より多い
- 無回答

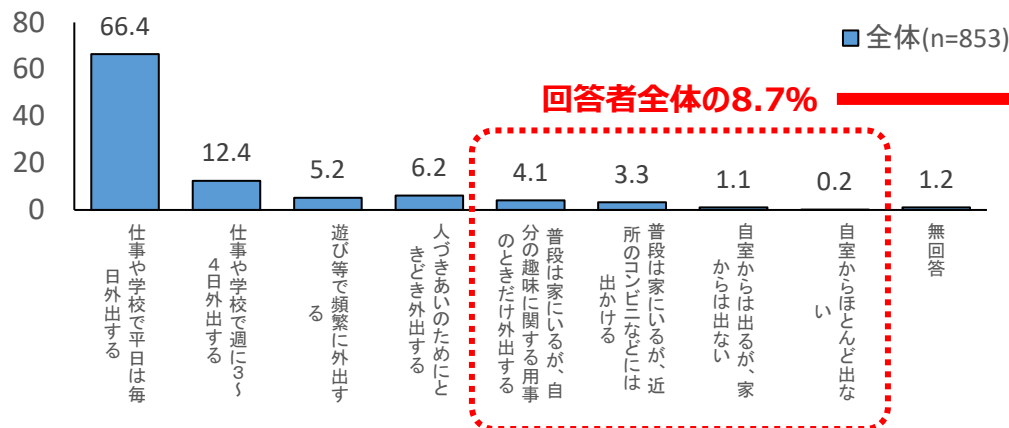
ほしかった（欲しい）サポート・支援



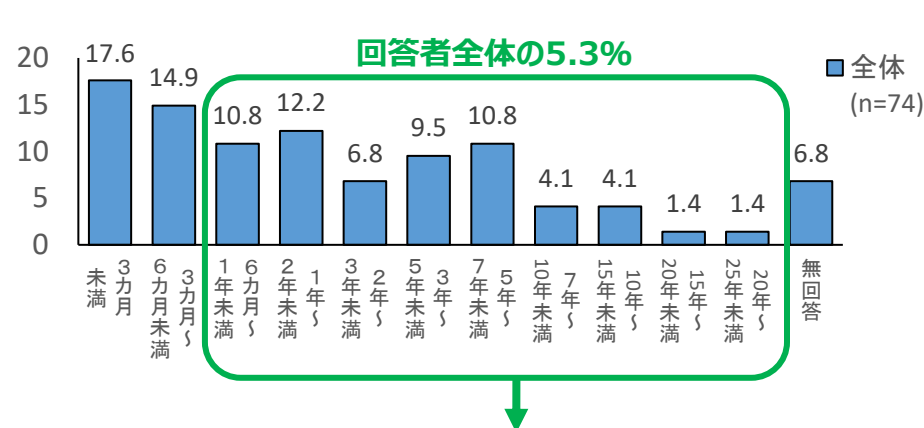
外出頻度が低い（引きこもり）

- ✓ 外出頻度が低い人は全体の8.7%であり、その状態が6カ月以上続いている人は、全体の5.3%となっています。
- ✓ 外出頻度が低くなった年齢は、「20～24歳」が他よりやや高く、外出頻度が低くなった理由としては、「その他」が最も高くなっています。

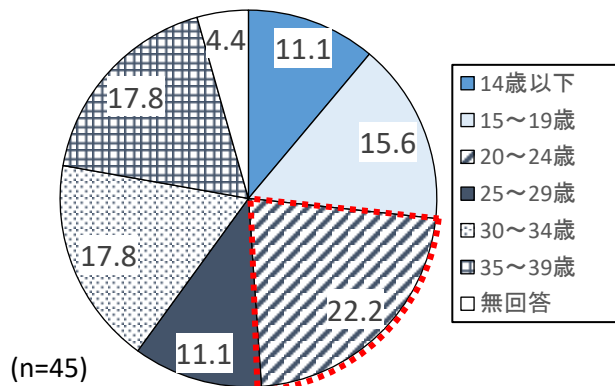
現在の外出頻度



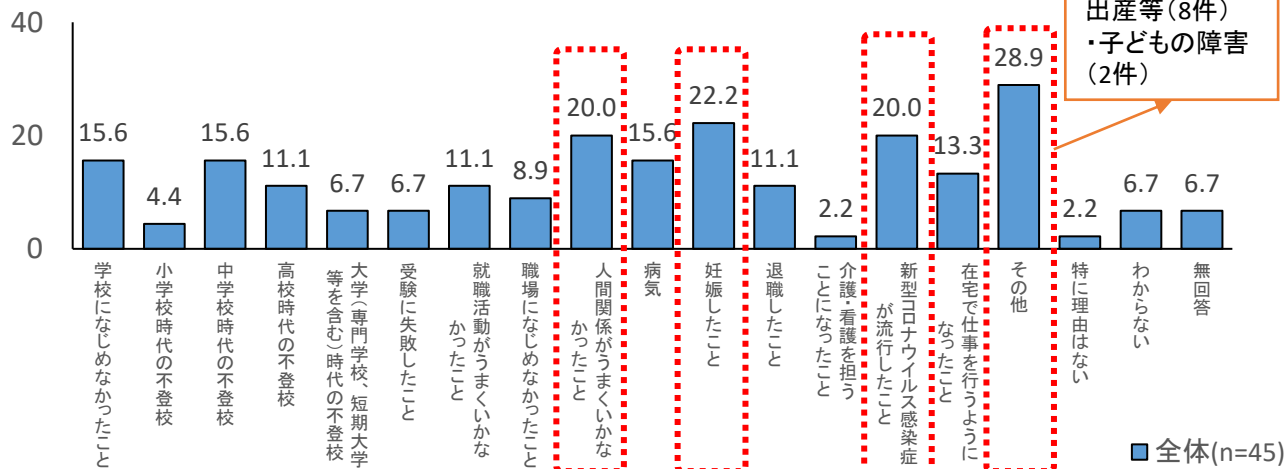
現在の外出頻度になってから経過した時間



何歳から外出頻度が低くなったか



外出頻度が現在のようになった理由

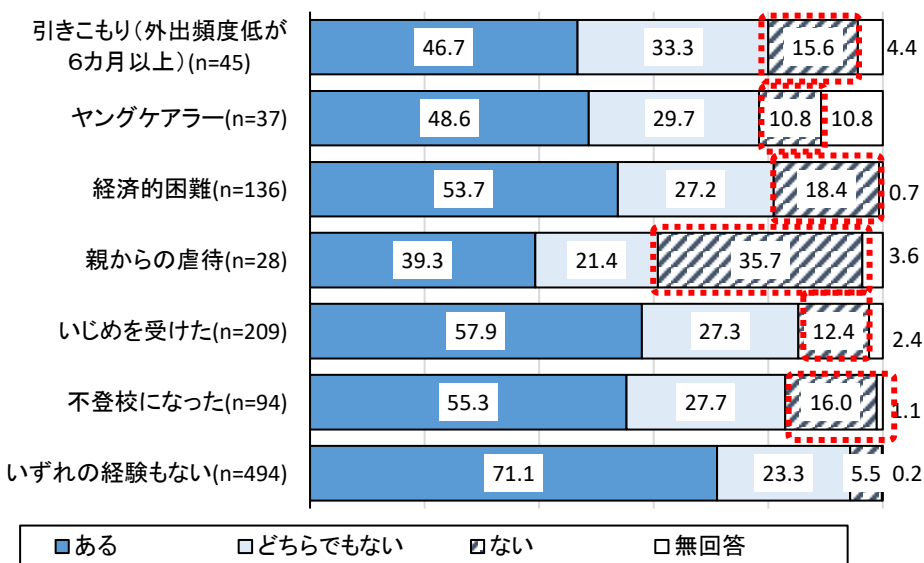


外出頻度が低くなり、6カ月以上経っている人

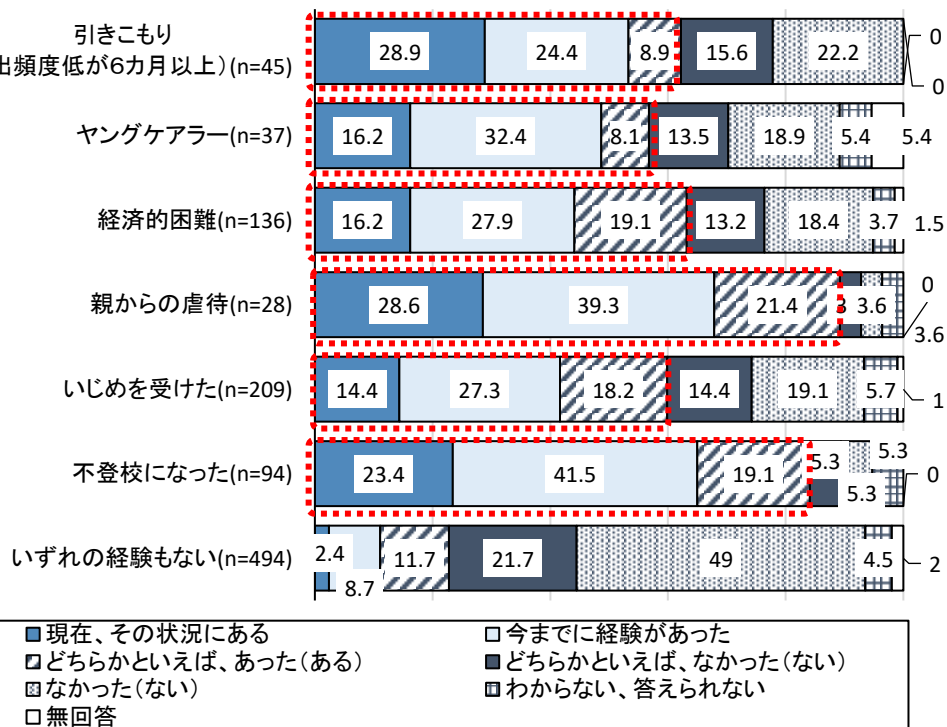
困難な経験を持つ人の状況

- ✓ 困難な経験をした人は、いずれも1割以上がストレス発散方法が「ない」と回答しています。また、該当者数が少ないため、参考となりますが『親からの虐待』を受けた人は、35.7%がストレス発散方法が「ない」と回答しています。
- ✓ 社会生活や日常生活を円滑に送ることができなかった経験がある割合が高く、『親からの虐待』『不登校になった』経験がある人は8割以上が経験しています。

ストレス発散方法の有無



社会生活や日常生活を円滑に送ることができなかった経験



意見を言う方法

- ✓ 意見を言う方法としては、「SNS（LINE、Xなど）」と「アンケート調査」が全年齢で高くなっています。
- ✓ 「考えたことがない」の回答がどの年齢層でも1割以上います。

自分の環境をより良くするために意見を言う場合に希望する方法

